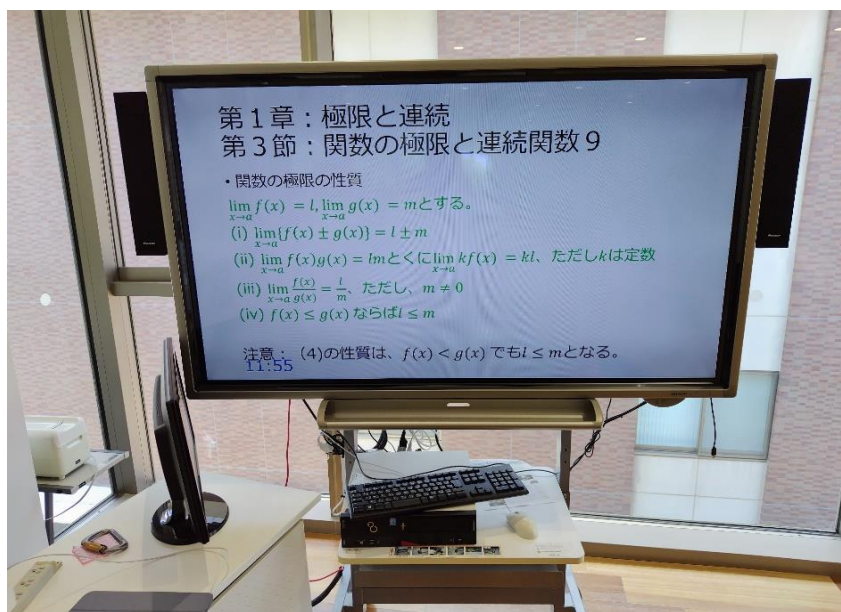


学部・学科	人間教育学部・人間教育学科	氏名	森一弘
1. 教育の責任			
担当授業科目 ・体育科指導法（2単位 3年配当） ・体育実技の指導法（2単位 3年配当） ・特別活動及び総合的な学習の時間の指導法A（初等）、B（中等）（2単位 3年配当） ・人間教育実践力開発演習Ⅳ（2単位 4年配当） ・人間教育学（2単位 1年次配当） ・教育と日本の伝統文化（2単位 選択） 以上の科目を担当している。受講学生の中に将来、小学校・中学校の教員になりたいという希望を抱いている。私の専門である、小学校体育、総合的な学習の時間、特別活動などの指導法を中心に、科目の目的、指導内容、評価方法等を学び、子どもたちに、主体的に取り組んでいくことの意義を教えて欲しい。 特に体育科指導法・体育実技の指導法に関しては、体育科教育の本質を学生に伝えている。特に体育科の見方・考え方を捉えて、生涯スポーツにつながるようにするための指導法を指導したい。			
私の教育理念・目的を学部のディプロマポリシーに則り、次のような学生を育成したいと考えている。			
教育理念として、体育科教育を主として考えると教師にとって必要な資質は、教科の指導力（内容・方法）、社会性の指導力、子どもへの情熱・愛情などである。これらの資質を、実務家教員として現場からの具体的取り組みを通して指導し、将来「子どものための学校づくり」を実践できる教育者を育てたい。 具体的な目的となるものは、次の7点である。 ①広く豊かな社会的常識をもち、人間的社会的に成熟している ②教職に対する使命感をもち、児童生徒に教育的な愛を持って接することができる ③学校現場の様々な教育課題に適切に対応し、チームとして行動することができる ④子どもの発達に応じて授業を構想し指導を工夫する教育の専門家である ⑤自己の学習を振り返り、理論と実践を結びつけた研修を継続的にできる ⑥保護者や地域の人等、学校外の人等と広く連携する力を身につけている ⑦日本の伝統文化を深く理解し、国際的な感覚を身につけている			
3. 教育の方法			
①広く豊かな社会的常識をもち、人間的社会的に成熟している学生の育成のために 授業内でなるべく対立する教育の概念、考え方とそれに関連する事例を提示して、学生がディスカッションし易いテーマを授業内容に選定する。 ②教職に対する使命感をもち、児童生徒に教育的な愛を持って接することができる学生の育成のために ④子どもの発達に応じて授業を構想し指導を工夫する教育の専門家である学生の育成のために 指導計画を立てる時に、「できない子」「わからない子」に視点を当てさせ、具体的な声かけ、指導の方法を検討させる。また模擬授業終了後の検討会においても、評価Cへの子どもへの指導者としての言葉がけ、立ち居振る舞いを検討させる。そのことによって学生が自ら考え行動する姿勢を身につけさせる。 ③学校現場の様々な教育課題に適切に対応し、チームとして行動することができる学生の育成のために ⑤自己の学習を振り返り、理論と実践を結びつけた研修を継続的にできる学生の育成のために 模擬授業を検討するチームを作り、学生間で対話的活動を取り入れディスカッションをしながら指導案を作成させる。また、模擬授業終了後リフレクションシートを全員に書かせ、交流する場面を取り入れていく。このことにより、仲間と課題を共有し、その課題を解決していこうとする姿勢を身につけさせる。 ⑥保護者や地域の人等、学校外の人等と広く連携する力を身につけている学生の育成のために 実務課教員として、実際にあった保護者・地域の人々との活動や問題となった点を教材化し、学生に考えさせる。また、考え体験や具体的な取り組みを交流させ、他者の思いを受け止めさせるような取り組みを行う。 ⑦日本の伝統文化を深く理解し、国際的な感覚を身につけている学生の育成のために 運動会の歴史、徒手体操の歴史、学習指導要領の変遷などを教材として扱い、日本の体育教育の歴史を知らせることにしている。また、新スポーツ、新しい種目の紹介や実際に体験させ、多様性をテーマにした教材も用意していくことにしている。			

4. 教育の成果
登美ヶ丘キャンパスへの移転に伴い、新校舎のコンセプトとして「主体的に仲間と協働しながら学ぶ空間」とし、開放的な教室・コモンズ・研究室を配置した。学生と教員の精神的・物理的な距離が近く「面倒見のよい」教育が実践されている。学生は、コモンズを利用し学び合い、また、ゼミ活動では互いに議論する姿が見られる。このようなオープンな学びの場を提供したが、今年度の公立教員採用試験の合格者が増加したことにつながったのではないかと考えている。
5. 今後の目標
学生を認めていく言動を行い、学生が「できた」・「成長した」と実感できる教育活動を実施したい。コロナ禍の3年間、高等学校で過ごした学生・大学で過ごした学生が多い中、安心できる学びの場を提供することが何よりであろう。そのために、協働的な学びの空間をコンセプトにした施設をフル活用し、仲間づくり、知の生成、楽しみづくりを実感できる学部運営を行いたい。
・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）
・ 学生評価アンケート ・ シラバス（公開）

ティーチングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部人間教育学科	氏名	根岸 章
1. 教育の責任			
・担当授業科目：人間教育実践力開発演習Ⅱ、人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）、人間教育学ゼミナールⅡ（応用）、解析学基礎、解析学A（テラー展開）、解析学B（複素関数）、解析学Ⅰ（ルベーグ積分）、解析学Ⅱ（関数解析）、応用数学Ⅲ（微分方程式） ・各種学生支援：コモンズ7の書籍管理			
2. 教育の理念・目的			
・自らの教育理念と目的：本学の教育理念に掲げられた「実践力を持った人材」を育成するため、日々の学習を通じて数学の広範な分野における確かな知識と教育スキルを習得し、熱意をもって生徒指導を行える中学・高校の数学科教員を養成する。 ・価値観・信念：数学の世界は、日常・現実の世界と密接な関係を持ちつつそれとはまったく異なった側面を持つ広大な世界であり、数学はその世界の中で使われる世界共通の言語であり、数学の学修は数学の世界へ入るためのパスポートである。 中学・高校の数学で必要なのは公式を暗記することではなく、数学に対する理解を深めることである。問題演習はそのための手助けに過ぎない。			
3. 教育の方法			
・学生との接し方：教職の専門科目では、それぞれの科目で知識・理解が不十分な場合には、学習態度如何に関わらず単位修得を認めない必要があると考えている。そのため、日頃の学習の重要性を説くとともに、わからない点は質問に来るように指導している。その上で、学生との距離感に気を付け、客観的に成績がつけられるように留意している。 ・授業の工夫：各科目で、授業ごとに課題プリントを配布、回収し学生の受講態度や理解度のチェックを行っている。また、授業に用いたスライドをコモンズ7のモニタに表示し、いつでも復習できるようにしている。テキスト内容の解説と共に、関連する中学・高校数学の内容説明を行っている。「解析学基礎」では、学生一人一人に中学・高校分野の作問（模範解答・解説を含む）をさせ、問題作成や模範解答の書き方の学習を個に応じに行っている。 ・FD/SD活動等にかかわる内外の研修会への参加：学内で行われる研修会には必ず参加（または事後のビデオ視聴）している。年2回行われる専門分野の学会（日本数学会）に参加した場合、同時期に行われる数学教育学会にも必要に応じて参加している。 ・自らの専門分野の成長：量子ウォークについての研究を進めている。			
4. 教育の成果			
・達成できたこと、できなかったこと：解析学の作問については、登録26人中25人が10問以上を達成できた（表1）。また、学習時間の増加については、アンケート結果より、解析学Aは前期の学部平均2.44を上回る3.09、解析学基礎は後期の学部平均2.91を上回る3.33となった。 ・授業アンケートの結果：前期の解析学Aについては、学習時間以外のすべての項目で学部平均を下回る結果となっていた。後期の解析学基礎については、ほとんどの項目が学部平均と同等の数値となった。解析学Bについては、アンケートの回収率が悪かったので、コメントは省略する。			
5. 今後の目標			
・短期的目標：現在の教員採用試験合格者を維持・向上させるとともに、教員採用試験受験率を8割を目標に向上させる。 ・長期的目標：卒業生の教え子が数学教員を志向し、本学に入学するような好循環を維持できるようにする。			
・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）			
1. コモンズ7の書籍管理の根拠資料：シート「コモンズ状況」 3. 授業の工夫の根拠資料：シート「コモンズ状況」 4. 達成できたことの根拠資料：シート「表1」 授業アンケートの根拠資料：シート「アンケート結果」			



2022年度解析学基礎 学生作問状況表

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	計
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	15
☐	☐	☐	☐	☐				☐	☐						7
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐						10
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐						10
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	15
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	15
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐		14
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	15
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	15
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	15
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	15
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	15
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐				12
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	15
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	15
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	15
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	15
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	15
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐		14
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	15
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐						10
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	15
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	15
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	15
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐			☐	☐	☐	10
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐					10
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐						13.54

2022年度

授業評価アンケート(集計表)

開講年度

2022年度

火曜日1時限

根岸 章

解析学A(テラー展開)

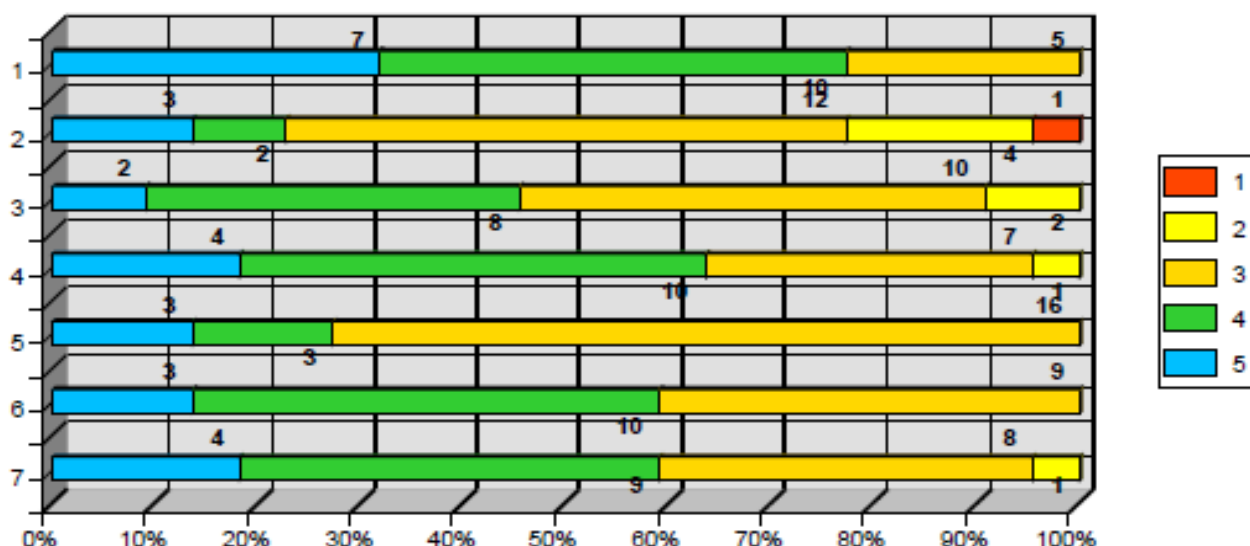
アンケート総数

22 枚

5段階評価	5:5	4:4	3:3	2:2	1:1
-------	-----	-----	-----	-----	-----

1. この授業に積極的に参加していますか。
2. この授業を理解するのに1週間に授業時間外でどれほど学習をしていますか。
3. 教員の説明はわかりやすいですか。
4. 毎時間の授業の要点は明確ですか。
5. 授業内容の分量は適切ですか。
6. 教員の話し方は聞き取りやすいですか。
7. 提示された資料(文字、図表など)はわかりやすいですか。

評価	5	4	3	2	1	平均
集計	7	10	5	0	0	4.09
集計	3	2	12	4	1	3.09
集計	2	8	10	2	0	3.45
集計	4	10	7	1	0	3.77
集計	3	3	16	0	0	3.41
集計	3	10	9	0	0	3.73
集計	4	9	8	1	0	3.73



提示された資料(文字、図表など)はわかりやすいですか。
(5段階評価)とても読み取りやすい、読みやすい、どちらともいえない、読み取れない、とても読み取れない

1) 参加していますか。
積極的である、積極的である、どちらともいえない、消極的である、とても消極的である

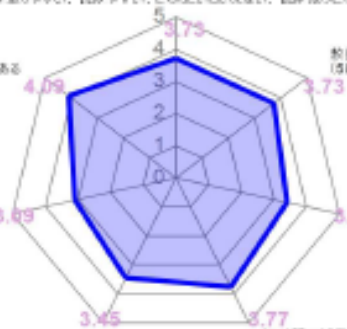
教員の話し方は聞き取りやすいですか。
(5段階評価)とても聞き取りやすい、聞き取りやすい、どちらともいえない、聞き取れない

2) この授業を理解するのに1週間に授業時間外でどれほど学習をしていますか。
(5段階評価) 120分以上、120分未満、90分以上、60分未満、少ない

授業内容の分量は適切ですか。
(5段階評価)とても多い、多い、どちらともいえない、少ない、とても少ない

教員の説明はわかりやすいですか。
(5段階評価)とてもわかりやすい、わかりやすい、どちらともいえない、わかりにくい、とてもわかりにくい

毎時間の授業の要点は明確ですか。
(5段階評価)とても明確であった、明確であった、どちらともいえない、不明確であった、とても不明確であった



2022年度

授業評価アンケート(集計表)

開講年度

2022年度

火曜日3時限

根岸 章

解析学B(複素関数)

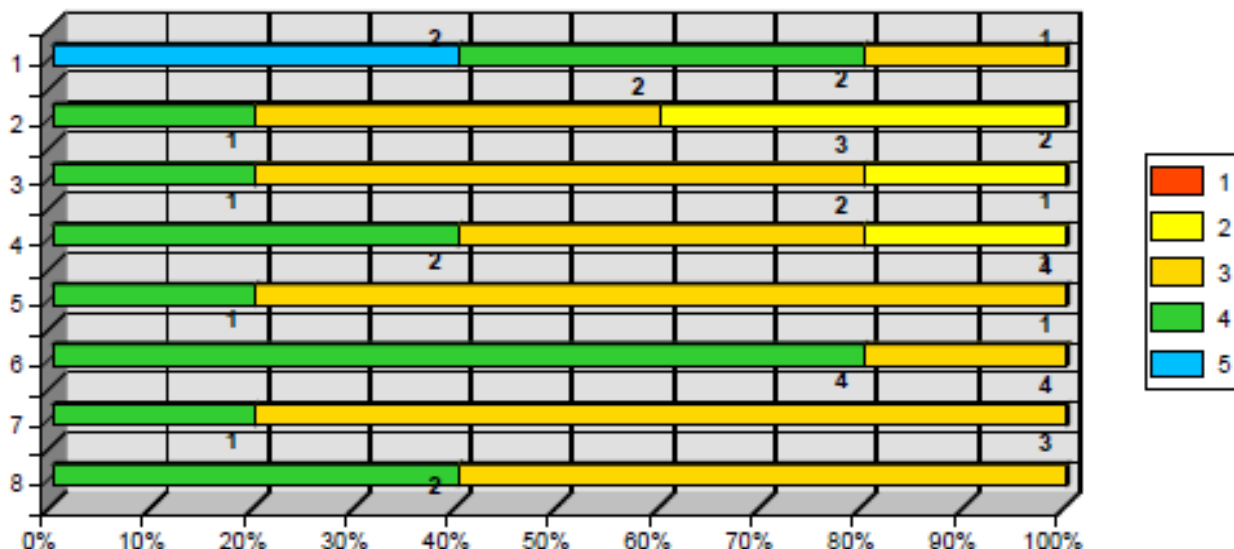
アンケート総数

5 枚

5段階評価	5:5	4:4	3:3	2:2	1:1
-------	-----	-----	-----	-----	-----

1. この授業に積極的に参加していますか。
2. この授業を理解するのに1週間に授業時間外でどれほど学習をしていますか。
3. 教員の説明はわかりやすいですか。
4. 毎時間の授業の要点は明確ですか。
5. 授業内容の分量は適切ですか。
6. 教員の話し方は聞き取りやすいですか。
7. 提示された資料(文字、図表など)はわかりやすいですか。
8. この授業は、総合的にみて満足できるものでしたか

評価	5	4	3	2	1	平均
集計	2	2	1	0	0	4.2
集計	0	1	2	2	0	2.8
集計	0	1	3	1	0	3
集計	0	2	2	1	0	3.2
集計	0	1	4	0	0	3.2
集計	0	4	1	0	0	3.8
集計	0	1	4	0	0	3.2
集計	0	2	3	0	0	3.4



この授業は、総合的にみて満足できるものでしたか
(5段階評価) かなり満足、まあまあ満足、どちらともいえない、普通、少し不満、かなり不満

1. 積極的に参加していますか。
積極的である、積極的である、どちらともいえない、消極的である、とても消極的である

7. 提示された資料(文字、図表など)はわかりやすいですか。
(5段階評価) とても読み取りやすい、読みやすい、どちらともいえない、読み取りにくい

2. この授業を理解するのに1週間に授業時間外でどれほど学習をしていますか。
5週(約120分)以上、120分未満、60分未満、60分未満、していない

6. 教員の話し方は聞き取りやすいですか。
(5段階評価) とても聞き取りやすい、聞き取りやすい、どちらともいえない、聞き取りにくい

3. 教員の説明はわかりやすいですか。
とてもわかりやすい、わかりやすい、どちらともいえない、わかりにくい、とてもわかりにくい

5. 授業内容の分量は適切ですか。
(5段階評価) とても多い、多い、どちらともいえない、少ない、とても少ない

4. 毎時間の授業の要点は明確ですか。
(5段階評価) とても明確であった、明確であった、どちらともいえない、不明確であった、とても不明確であった



2022年度

授業評価アンケート(集計表)

開講年度

2022年度

火曜日4時限

根岸 章

解析学基礎

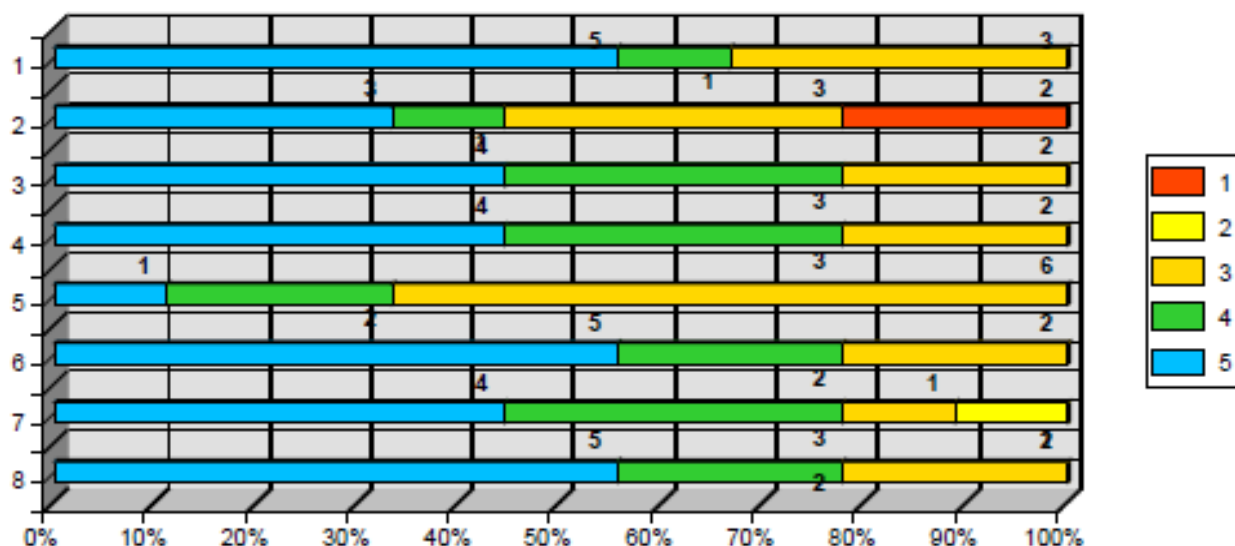
アンケート総数

9 枚

5段階評価	5:5	4:4	3:3	2:2	1:1
-------	-----	-----	-----	-----	-----

1. この授業に積極的に参加していますか。
2. この授業を理解するのに1週間に授業時間外でどれほど学習をしていますか。
3. 教員の説明はわかりやすいですか。
4. 毎時間の授業の要点は明確ですか。
5. 授業内容の分量は適切ですか。
6. 教員の話し方は聞き取りやすいですか。
7. 提示された資料(文字、図表など)はわかりやすいですか。
8. ・この授業は、総合的にみて満足できるものでしたか

評価	5	4	3	2	1	平均
集計	5	1	3	0	0	4.22
集計	3	1	3	0	2	3.33
集計	4	3	2	0	0	4.22
集計	4	3	2	0	0	4.22
集計	1	2	6	0	0	3.44
集計	5	2	2	0	0	4.33
集計	4	3	1	1	0	4.11
集計	5	2	2	0	0	4.33



・この授業は、総合的にみて満足できるものでしたが
(5段階評価) かなり満足、まあまあ満足、どちらともいえない、普通、少し不満、かなり不満

・満足していますか。

積極的にある、積極的にある、どちらともいえない、消極的である、とても消極的である

提示された資料(文字、図表など)はわかりやすいですか。

(5段階評価) とても読み取りやすい、読みやすい、どちらともいえない、読み取りにくい

この授業を理解するのに1週間に授業時間外でどれほど学習をしていますか。

5週間以上(120分以上)、120分以上、60分以上、60分未満、していない

教員の話し方は聞き取りやすいですか。

(5段階評価) とても聞き取りやすい、聞き取りやすい、どちらともいえない、聞き取りにくい

はわかりやすいですか。

とてもわかりやすい、わかりやすい、どちらともいえない、わかりにくい、とてもわかりにくい

授業内容の分量は適切ですか。

(5段階評価) とても多い、多い、どちらともいえない、少ない、とても少ない

毎時間の授業の要点は明確ですか。

(5段階評価) とても明確であった、明確であった、どちらともいえない、不明確であった、とても不明確であった



ティーチングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部	氏名	善野八千子
1. 教育の責任			
私は本学において、小学校一種免許取得に関わる専門科目及び演習科目を担当している。 中でも「教育行政学A（初等）」、「生活の理解」、「生活科指導法」、「人間教育実践力開発演習Ⅲ」「教育実習事前事後指導（小）」「教育実習」「教職実践演習」を教育している。 また、課外においては、教員を志望する学生の1・2年次生には基礎学力の定着のための学修方法の工夫や学習習慣の相談について指導している。 さらに、3・4年次生に対しては、面接指導及び場面指導、模擬授業などの個別指導を意欲の継続や心のケアなど、年間を通して採用試験直前または当日、卒業後の指導まで、当該学生等の要望に応えた指導を継続している。			
2. 教育の理念・目的			
私は、本学の教育活動において、以下の3点を重視している。 1)教員免許を取得する学生としての人間力の向上 2) 教育現場で求められる教育実践力の育成 3) 社会に貢献し、時代の進展に対応する豊かな表現力の養成			
3. 教育の方法			
上述の教育理念を達成するため、小学校教員1種免許取得に関わる「教育行政学A（初等）」及び「生活の理解」「生活科指導法」、並びに「人間教育実践力開発演習」「教育実習事前事後指導（小）」「教職実践演習」では、次のような授業を行っている。 これらの科目では、実習及び学校現場で活用できる実践力や表現力の育成を目標としている。そのため、教育の現場で直接的な関わりの深い実践事例や教育課題を取り上げ、子どもの発達に応じた基本的な知識及び実践を交えて教授している。さらに、学校間接続や保護者対応への実践に結びつくよう図っている。 また、人間関係構築や相互評価を意図したグループワーク、毎回の授業時での教員または学生自身の体験と表現の場を設けるようにしている。 学生個々の理解力や学びの基礎力を考慮し、個別の理解度を確認するために、リフレクションシートへのコメントや優れた記述紹介により意欲や全体の質向上につなげている。さらに、毎回授業内容に即した課題を授業時間外の時間を利用して個人指導を継続している。 29年間の小学校教員及び管理職、教育委員会事務局主任指導主事として、特に生活科移行期から幼小接続カリキュラム改善に着手し、「教育行政」の実践と「学校経営」「学級経営」及び教員の資質向上等の研究に取り組んできた。これらの現場経験を生かし、教科等の知をどのような活動を通して学校教育現場の実際の課題解決と合致させる具体的な指導をする。 一点目は、ICT活用して、学校現場のニュースや法令から情報を表出させ、自分ごととして課題解決する展開である。二点目は、新たな知を創出する場面において、自己の変容を言語化させ自覚化を図る必要性を実感させる。とりわけ、教育を巡る今日的な課題及びその課題解決のための対応策についてアクティブラーニングをもとに学修を深める。 教育改善への取り組みとして、学内で開催されるFD研修には全て参加している。また、授業公開・見学も時間をやりくりして参加し、他の授業科目の進め方や学生の取り組み方等の参考点を探している。 教員個人としては、授業評価アンケートの結果を受けて、その期の授業について反省を加えている。また、毎年の年度末のシラバス提出時に、次期の授業内容・授業展開について、授業時における学生の反応も参考にしながら、新たに学会や研究論文から得た知見及び教育方法を更新したシラバスとなるよう努めている。			
4. 教育の成果			
【2023年度後期授業評価アンケート】の結果においては、全ての質問項目が全体の平均値より高い結果が出た。 「生活科指導法」履修19名の中19名（100％）が回答した「総合的な満足度4.95」は、全体平均と比較して満足度が高かったと言える。とりわけ、「提示された資料はわかりやすい」4.89、「毎時間の要点は明確」4.89は学習規律・生活規律を重視した低学年指導の実践力を自ら身に付けていくことになっている。自由記述に見られる「教員の熱意や意欲が感じられる」が4.89と高い評価を得ているのもやりがいをもって伝わった実感がある。受講者一人一人に模擬授業をする機会を与えたことも、課外の予習に個別の課題解決のために寄り添った成果として、次年度も継続していきたい。 今回は個別の意欲喚起と知識の習得を目的として、個に応じた指導や毎回のチーム5名ずつをグループ指導したことや課外でもリハーサル及びメール指導を重ねたこともその一つであると考えられる。 自由記述では、「模擬授業のときに事前の練習があり、自分の足りないところや改善点など授業をする前に教えて貰ったことで、よりよい模擬授業に近づけることができた。」「授業をする際の言葉遣いや声掛けの工夫など、自分の模擬授業だけでなく周りの人の模擬授業からも学ぶことができました。」「とても丁寧なアドバイス、サポートしていただけたことです。教師になるのに大事なことを沢山学ばせて頂きました。」などが見られた。			

5. 今後の目標

6. 今後の目標

1) 短期的な目標

①学生の主体的な学びの支援、②実習における実践力の育成、③科目間の連携（学修内容を他の科目で実践、応用できる力の育成）

2) 中・長期的な目標

人間力に根ざして常に探求心を持ち、体験に基づいた豊かな感性と知識・技術を持った学生の養成

実践に関わる科目では、社会の変化に対応した学びのあり方を探り、学生自身が文化や自然の魅力を探求し、五感を張り巡らして物事を捉える体験をすることによって感性が揺り動かされ、表現力や実践力に繋げてほしいと考えている。実践を通じた教授内容によって学生の興味を喚起し、魅力ある体験の場が提供できるよう努力を重ねていきたい。

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

授業評価アンケート結果

2022年度

授業評価アンケート(集計表)

開講年度

2022年度

水曜日3時限

善野 八千子

生活科指導法

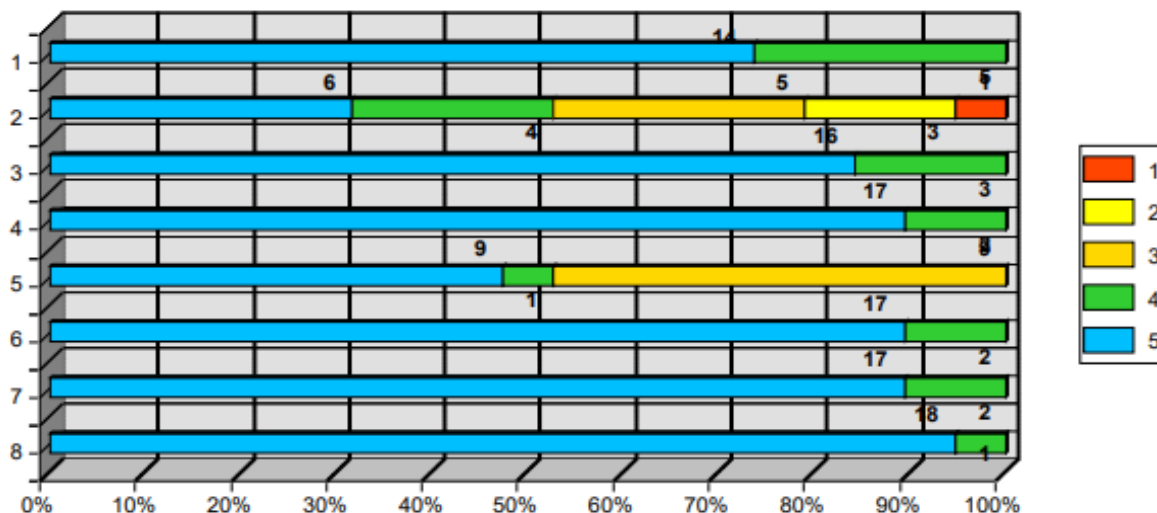
アンケート総数

19 枚

5段階評価	5:5	4:4	3:3	2:2	1:1
-------	-----	-----	-----	-----	-----

- この授業に積極的に参加していますか。
- この授業を理解するのに1週間に授業時間外でどれほど学習をしています
- 教員の説明はわかりやすいですか。
- 毎時間の授業の要点は明確ですか。
- 授業内容の分量は適切ですか。
- 教員の話し方は聞き取りやすいですか。
- 提示された資料（文字、図表など）はわかりやすいですか。
- この授業は、総合的にみて満足できるものでしたか

評価	5	4	3	2	1	平均
集計	14	5	0	0	0	4.74
集計	6	4	5	3	1	3.58
集計	16	3	0	0	0	4.84
集計	17	2	0	0	0	4.89
集計	9	1	9	0	0	4
集計	17	2	0	0	0	4.89
集計	17	2	0	0	0	4.89
集計	18	1	0	0	0	4.95



ティーチングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部・人間教育学科	氏名	中島 栄之介
1. 教育の責任			
・担当授業科目 特別支援教育総論、病弱者教育課程論と指導論、肢体不自由者教育課程論と指導論、重度・重複障害者教育課程論と指導論 特別支援、特別支援A(初等)、特別支援B（中等） 特別支援教育実習事前事後指導 現代教育課題B（特別支援） 人間教育学ゼミナールⅠ(基礎)、人間教育学ゼミナールⅡ(応用)、卒業研究 専門職種間連携特論 ・各種学修支援 キャリアセンター長（令和4年度まで） キャリアセンター長として、教員採用試験、国家試験、就職支援についてキャリアセンターの運営に携わり、学生の希望する進路の実現に向けて組織的・体系的に対応できるように、センター室長と共に各種対策講座、リメディアル講座、模擬試験、相談業務等の連絡調整等を行っている。 ・特別支援教育 特別支援教育担当教員として、特別支援教育に関することや介護等体験についてなどの学修支援を行っている。			
2. 教育の理念・目的			
・自らの教育理念と目的 平成19年より始まった特別支援教育を通して「障害の有無やその他の個々の違いを認識しつつ様々な人が生き生きと活躍できる共生社会の形成の基礎となる」人材の育成を目指す。学校現場においては、本学の「人を支える人となる」教員の育成を目指す。 「教育に科学とロマン」という本学のモットーの一つに基づき、最新の特別支援教育の成果を学校現場にいかすことのできる人材を育成する。 ICT機器などを用い、適切な支援機器や支援方法などを活用することのできる人材育成を目指す。 ・価値観・信念 実務家教員として学校現場の様子を学生に伝えと共に、指導に当たっては科学的根拠に基づき特別支援教育の知識と技能を持った教員養成にあたりと共に学校現場の課題を見据えながら研究を進める。			
3. 教育の方法			
・学生との接し方 多様な進路希望に対応するために、学部生としての必要な技能と知識について機会あるごとにふれるようにしている。 また、将来学校現場で働く（ボランティアを行う）ことについて考えながら現場で最低限必要な知識や技能を念頭に置き学修するように意識させるようにしている。 ・授業の工夫（授業の方法、内容等） 【特別支援教育に関する総論等】特別支援教育総論 特別支援・特別支援A(初等)・B（中等）、現代教育課題B（特別支援） 平成19年に特別支援教育が始まり特別支援学校や特別支援学級以外でも特別支援教育に関する知識や技能が求められ必要とされている。そこで、特別支援教育に関する内容だけではなく、「障害」についての考え方、就学前・就学中・卒業後の生活、手帳や年金など各種の制度など幅広く「障害」について取り上げ基礎的な知識、考え方について学修を深めたい。 【特別支援教育の各論】病弱者教育課程論と指導論、肢体不自由者教育課程論と指導論 重度・重複障害者教育課程論と指導論 特別支援教育を進める際には、他職種(福祉・医療・保健・労働・行政等)と連携する必要がある。そのため、特別支援教育に限らず、幅広く他職種の専門家と対等に連携できるようにするための知識も必要である。そこで、各論の内容はもちろん、各論を進めるにあたっての基礎知識にもふれながら授業を進めていきたい。障害特性や支援のニーズに合わせた教育課程の編成についての考え方、視点にもふれながら学修を進めていく。各論においては、現在課題となっている重複障害及び、教育課程編成上必要となるカリキュラムマネジメントについても必ず取り上げるようにする。 【特別支援教育実習】特別支援教育実習事前事後指導 特別支援学校での教育実習を行うにあたり、特別支援教育についての専門性を授業の中でどのようにいかに加えて各教科の専門性をどのようにいかにかを検討しながら、模擬授業を通して授業の在り方、教材研究の進め方、個別の指導などについて演習を行う。 【卒業研究】人間教育学ゼミナールⅠ(基礎) 人間教育学ゼミナールⅡ(応用) 卒業研究 卒業研究では、何らかの形で「障害」と関係することとしている。学生の興味や関心、将来の進路などにより幅広い内容を取り上げることを予定している。そのため、まず基本的な知識や方法を身に付けるため、課題を調べる、研究方法を理解する、論文通読などを行う。各回のゼミでは課題と研究の交流について行い学修を進めていく。また、特別支援教育関係の研究室で合同ゼミを実施し研究内容を交流する。			

【大学院】専門職種間連携特論

言語聴覚士及び特別支援教育にたずさわる教員としての両立場より、リハビリテーション職とのかかわりを取り上げることが予定している。特に、連携ということを視野に置き、言語聴覚療法、特別支援学校の実際を取り上げ連携の方法について考察していく。

- ・FD/SD活動等にかかわる内外の研修会への参加
学内で開催される研修会に参加し、授業の中に取り入れようとしている。
- ・自らの専門分野の成長
現在、大学院で専門分野について研究を行っている。
学会へも発表を行っている他、学会運営に携わっている。
地域貢献活動として兵庫県言語聴覚士会小児対策部の委員として活動している。

4. 教育の成果

- ・達成できたこと、できなかったこと（達成レベル）
教育の方法については、概ね実施することができている。資料についても実際の教科書（点字等）を提示したり、ICT機器を操作するなど、体験を多く取り入れるとともに文科省通知などの資料もできるだけ提示するなどすることができた。授業資料については、毎回、スライド資料を準備してきた。ICT機器についても、特別支援教育に必要なアクセシビリティ機能などを中心に体験的することができている。
- ・授業アンケートの結果
授業アンケートについて、全体の評価を上回っているが、授業外の学習時間に課題がある。そこで、各授業ごとにインターネットなどを利用した課題を作成し実施することで、改善していきたい。

5. 今後の目標

- ・短期的
情報が常に更新されていく分野であるので、スライドや授業資料などに最新の情報や時事の話題を入れていきたい。
授業時間外での勉強時間を確保するための課題を工夫する。
- ・長期的目標
自らの研究の成果を授業に取り入れることで、より実践的で学校現場に即した学修をなるようにしたい。
- ・発展的
本学が地域の特別支援教育の中心となる様な機能（例えば、特別支援教育センターなど）を有し、地域社会に貢献できるような仕組み作りを行っていききたい。

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

シラバス、授業アンケート（本学HPにて公開）
キャリアセンターについて（本学HPにて公開）

ティーチングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部・人間教育学科	氏名	西江なお子
1. 教育の責任			
【担当科目】 家庭科指導法、衣食住の理解、人間教育実践力開発演習Ⅳ、教職実践演習、人間教育学ゼミナール基礎、人間教育学ゼミナール応用 【各種学生支援】 ・教員に必要な知識・技能の確実な定着を図るべく、各科目の特性に応じた授業を工夫するとともに、個に応じた指導の徹底を図っている。具体的には科目や学修内容に応じて適宜ディスカッションやグループワーク等を取り入れるとともに、ICT機器を積極的に活用し学校現場で活用できる能力の育成を目指し支援している。 ・人間教育実践力開発演習Ⅳにおいては教員に必要な資質能力を身に付けさせるべく、キャリアセンター教職担当教員と連携を図り、実践力育成に向けての指導を徹底している。 ・キャリアセンター副センター長として、各部署と連携を密に図りながら、学生の就職支援を行っている。また必要に応じ適宜保護者との連携を図り、主体的に学びに向かう学生の育成を目指し支援している。教職志望学生に対しは教員採用試験に関する情報提供をするとともに、教育時事や面接指導、授業作りなど個に応じた指導を徹底して行っている。			
2. 教育の理念・目的			
「人を支える人になる」というスクールモットーのもと、豊かな人間性の学生を育てることを目指し教育に携わっている。幼稚園、小学校での教員経験を活かし、教職の魅力を伝えるとともに、学生一人一人が人間教育学部の学生としての自覚と誇りを持ち、教員に必要な資質・能力を身に付けられるよう、教育活動全体を通して学生指導にあたっている。			
3. 教育の方法			
【学生指導】 学生の自己実現に向けて、個に応じた丁寧な指導を心がけている。教員養成課程の特色を生かし、教職志望学生の増加と、教職に就くという自覚の向上を図るため、各科目において学生が常に教員の視点で思考する場面設定を行ったり、学生が学びの主体となるような授業構成を工夫したりして指導している。また、理解度の差に対しては個別対応やICT機器等を適宜活用するなど個に応じた指導を行い、学生が自信をもって社会に出ていけるよう実態の実態把握を徹底して行っている。 【授業の工夫】 ・家庭科指導法：家庭科の内容と教育目的について理解するとともに、家庭生活を大切にすることに関する科学的な知識・技能、衣や住及び消費者問題、地球環境への配慮等、児童を取り巻く諸課題について考えたり、模擬授業に向けて全学生に個別指導を行ったりして実践力育成を目指している。教材研究、指導案作成等の課題を課し、全学生にフィードバックし、家庭科の指導力育成を図っている。 ・衣食住の理解：家庭分野に関する幅広い知識・技能の育成を目指し、適宜実技やグループワークを取り入れながら授業を行っている。家族など身近な人間関係におけるコミュニケーション、食育をふまえた家事技術、衣や住などの環境に配慮した製作など、効果的な指導方法と授業効果についての教材開発やそれに伴う実践を行っている。 ・人間教育実践力開発演習Ⅳ：教員に必要な資質・能力であるコミュニケーション力、課題解決力等の能力を向上をめざし、教育課題や時事問題等の情報収集を行い、グループディスカッションを行ったり、面接や模擬授業などを実施したりすることを通して、学校現場で活かせる力の育成を図っている。 【FD/SD活動等にかかわる内外の研修会への参加】 学内FDに参加し、自身の授業方法やカリキュラム内容の改善・向上を図る努力を行っている。 【自らの専門分野の成長】 研究分野である家庭科教育において、所属学会である日本家庭科教育学会では支部役員、日本消費者教育学会は副支部長として研究を進めている。両学会において、学会員と教材開発に向けて研究を進めるとともに、研究の過程において得た知見を担当教科である衣食住の理解や家庭科指導法において学生に適宜情報を提供し、ディスカッションしたり、調査したり出来る環境を整えている。			
4. 教育の成果			
担当教科において、概ね満足度の高い授業を展開することができたと捉えている。具体的には、「この授業は、総合的にみて満足できるものだったか」、「教員は意欲的に取り組み熱心な指導をしていたか」という問いに9割の学生が「はい」と回答しており、学生の学びを保証することができたと考える。その要因として学修への不安を抱く学生への個別対応の徹底をはじめ、グループワーク、調査・発表、指導案作成など教科の特性に応じて工夫して行ったことが考えられる。今後も、学生の実態を把握し、必要な支援を適宜行う努力をしていく。			

5. 今後の目標

「人間教育学部」として、一人でも多くの学生が教員をめざし高い学習意欲のもと、教員採用試験突破に向けて勉強に取り組む姿勢を育成していくことを目標に今後も取り組んでいきたい。この目標実現に向けて、入学時から教職の魅力を各科目において伝えと共に、学生の教員としての資質・能力の育成にむけ、キャリアセンターと学部が協力し、実践力を身に着けられる授業を継続して行っていく。

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

・ シラバス、授業評価アンケート（本学HP参照）

ティーチングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部	氏名	青山 雅哉
1. 教育の責任			
・ 器楽演習Ⅰ（鍵盤楽器） ・ 器楽演習ⅠA（ピアノ） ・ 器楽演習ⅡA（ピアノ） ・ 音楽表現ⅠA（ピアノ・歌） ・ 音楽表現ⅡA（ピアノ・歌） ・ キーボードハーモニーⅠ ・ キーボードハーモニーⅡ ・ ソルフェージュⅠ ・ ソルフェージュⅡ ・ 器楽特殊演習ⅠA（ピアノ） ・ 器楽特殊演習ⅡA（ピアノ） ・ 人間教育実践力開発演習Ⅰ ・ 器楽合奏Ⅰ（和楽器を含む） ・ 器楽合奏Ⅱ ・ 器楽合奏Ⅲ ・ 器楽合奏Ⅳ ・ その他 音楽専修GTでのピアノレッスン			
2. 教育の理念・目的			
総合的な音楽理解と音楽表現力を深め、音楽教育の場における柔軟な教育力、高度な実践力さらに豊かな人間力を身に付けた教育者の養成を目指している。学生個々の理解力や基礎力を考慮し、個々に応じた課題への対応や個別指導のレッスンを授業時間外の時間を利用して行っていく。			
3. 教育の方法			
器楽演習、音楽表現等の授業ではピアノを中心にした基礎的な演奏や弾き歌いの技術と表現について学生個々の力に応じた指導を行っている。ソルフェージュでは聴音による音への感性を高め、初見演奏での読譜能力向上を目指している。キーボードハーモニーではメロディーへの伴奏付けやコードによる即興演奏により音楽創作への基礎的理解と技術力の獲得を目指している。器楽合奏では実践を通した気づきを各学生が発表していくことで指導方法への理解を深めるようにしている。器楽特殊演習では音楽演奏の実践を計画し、そのための練習内容を学生達が互いに検討していくことでその効果や指導方法への理解を深め、さらに音楽演奏の実践を通して音楽への総合的な能力の向上を目指している。全ての授業において現場で必要とされる音楽力の育成、向上を目標として毎回授業内容に即した課題を時間外学習として提示し、次回の授業においてその準備を前提にした授業展開を行うことで時間外学習の徹底を図っている。また、中・高（音楽）教諭への志望者へは音楽専修のGTとしての取り組みとして個別にピアノレッスンを行っており、志望学生への音楽教育者としてのさらなる能力獲得へ向けて支援をしている。			
4. 教育の成果			
学生個々のレベルや能力に合わせた指導方法により学生各自の学修意欲の向上がみられる。一方、音楽について基礎的理解や技術への学修に大変時間を要す学生には個別に対応してはいるが、その効率的な指導方法については今後の課題としている。			
5. 今後の目標			
学生個々のレベルや能力に入学前からの音楽経験上の違いによる開きがあり、共通した教育では一律に学びの機会とはならない面を改善をしていく。そのために学生達が互いに教え取り組んでいく環境を整えていくことで、共通した教育力を身に付けていく機会としていきたい。音楽専修学生への学修成果や目標設定へ効果を期待し、ピアノグレード制への検討を進めていきたい。			
・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）			
・ 器楽演習課題曲グレード表 ・ 授業成果としての演奏録音			

学部・学科	人間教育学部 人間教育学科	氏名	大西 雅博																																																												
1. 教育の責任																																																															
(1) 担当科目 2022年度 担当科目一覧表																																																															
<table><tr><td>授業科目名</td><td>開講学期</td><td>科目区分</td><td>対象学年</td></tr><tr><td>指揮法</td><td>前期</td><td>専門</td><td>3年生</td></tr><tr><td>人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）</td><td>通年</td><td>専門</td><td>3年生</td></tr><tr><td>基礎ゼミナールⅡ</td><td>通年</td><td>専門</td><td>2年生</td></tr><tr><td>人間教育実践力開発演習Ⅱ</td><td>通年</td><td>専門</td><td>2年生</td></tr><tr><td>人間教育実践力開発演習Ⅲ</td><td>通年</td><td>専門</td><td>3年生</td></tr><tr><td>教職表現力演習Ⅱ</td><td>通年</td><td>専門</td><td>2年生</td></tr><tr><td>卒業研究</td><td>後期</td><td>専門</td><td>4年生</td></tr><tr><td>器楽合奏Ⅰ（和楽器を含む）</td><td>通年</td><td>専門</td><td>1年生</td></tr><tr><td>器楽合奏Ⅱ</td><td>通年</td><td>専門</td><td>2年生</td></tr><tr><td>器楽合奏Ⅲ</td><td>通年</td><td>専門</td><td>3年生</td></tr><tr><td>器楽演習ⅠB（管打）</td><td>前期</td><td>専門</td><td>1年生</td></tr><tr><td>器楽演習ⅡB（管打）</td><td>後期</td><td>専門</td><td>2年生</td></tr><tr><td>器楽特殊演習ⅠB（管打）</td><td>前期</td><td>専門</td><td>1年生</td></tr><tr><td>器楽特殊演習ⅡB（管打）</td><td>後期</td><td>専門</td><td>2年生</td></tr></table>				授業科目名	開講学期	科目区分	対象学年	指揮法	前期	専門	3年生	人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）	通年	専門	3年生	基礎ゼミナールⅡ	通年	専門	2年生	人間教育実践力開発演習Ⅱ	通年	専門	2年生	人間教育実践力開発演習Ⅲ	通年	専門	3年生	教職表現力演習Ⅱ	通年	専門	2年生	卒業研究	後期	専門	4年生	器楽合奏Ⅰ（和楽器を含む）	通年	専門	1年生	器楽合奏Ⅱ	通年	専門	2年生	器楽合奏Ⅲ	通年	専門	3年生	器楽演習ⅠB（管打）	前期	専門	1年生	器楽演習ⅡB（管打）	後期	専門	2年生	器楽特殊演習ⅠB（管打）	前期	専門	1年生	器楽特殊演習ⅡB（管打）	後期	専門	2年生
授業科目名	開講学期	科目区分	対象学年																																																												
指揮法	前期	専門	3年生																																																												
人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）	通年	専門	3年生																																																												
基礎ゼミナールⅡ	通年	専門	2年生																																																												
人間教育実践力開発演習Ⅱ	通年	専門	2年生																																																												
人間教育実践力開発演習Ⅲ	通年	専門	3年生																																																												
教職表現力演習Ⅱ	通年	専門	2年生																																																												
卒業研究	後期	専門	4年生																																																												
器楽合奏Ⅰ（和楽器を含む）	通年	専門	1年生																																																												
器楽合奏Ⅱ	通年	専門	2年生																																																												
器楽合奏Ⅲ	通年	専門	3年生																																																												
器楽演習ⅠB（管打）	前期	専門	1年生																																																												
器楽演習ⅡB（管打）	後期	専門	2年生																																																												
器楽特殊演習ⅠB（管打）	前期	専門	1年生																																																												
器楽特殊演習ⅡB（管打）	後期	専門	2年生																																																												
(2) 学生支援																																																															
① マーチングバンド部顧問として、学生の募集活動及び入学後の指導を行うとともに、就職についてもサポートしている。 ② 音楽専修長として、専修内をまとめるとともに、より一層の発展を目指し、広報活動・就職活動に力を入れている。 ③ 学部運営委員として、各専修との調整を図りながら、学生ファーストの精神の下、運営に取り組んでいる。 ④ キャリアセンター委員として、学生の就職について、相談・アドバイス等のサポートをしている。																																																															
2. 教育の理念・目的																																																															
子供たちにとって、先生は新人も熟練も関係なく、全てがプロの教師でなければならない。若い教師にしか出来ないことは多々考えられるが、若いから出来ないという甘えは、教育現場では許されないと考える。失敗が許され、修正が出来るのは、学生である今しかない。より実践的な体験を通して、プロとしての厳しさと自覚を持たせたい。他人の意見を真摯に受け止めるとともに、失敗を素直に認めることにより、自らの成長に役立たせたい。学生だから、これくらい出来れば良いという評価ではなく、社会人としていかに有るべきかを基準に、人間力の向上を目指したい。																																																															
3. 教育の方法																																																															
授業においては、実際の現場でどのようなことが起こり得るかを想定しながら、実践的な学修を行っている。人前で話すことに慣れるため、模擬授業はもちろんのこと、様々な場面で意見を述べるよう設定している。また、他人の意見を受け入れる姿勢を養うため、他人から評価される場面も多く作っている。自分も他人のために意見を述べ、自分のために他人の意見を吸収するというサイクルを何回も繰り返すことにより、「話す」ことへの慣れや自信を身に付けさせている。そして「話す」から「伝える」「教える」ことへ発展させるためには、それに裏付けされた「技術」が必要であることに着目させ、自ら高い技術を身につけようとする姿勢を養っている。特に音楽は、実践的な技術が問われる場面が多いため、圧倒的な知識と技術が必要であることを、強く認識させている。まずは先生が生き生きと歌う、そして子供たちがその姿に影響され、歌うことの楽しさを知る。歌わせる技術ではなく、楽しさを伝えるためには、自身の高い技術が必要であることを自覚しなければならない。																																																															
4. 教育の成果																																																															
(1)達成出来た																																																															
・指揮法について、毎回高度な選曲にチャレンジし、自ら進んでより高い水準を目指す意欲が見受けられた。 ・人前で、ゆっくりと大きな声で話すことが出来るようになり、言葉の大切さが理解できたと思われる。 ・開発演習において、最初は討論や自己主張が苦手であった学生も、徐々に各場面に対する対応能力が高まってきている。 ・計画通り、ロビーコンサート（2年生）・クリスマスコンサート（2年生）・卒業コンサート（4年生）が開催できた。																																																															

- (2)達成出来なかった
- ・音楽の専門的な知識を幅広く習得することが出来ていない。（音楽史、音楽理論、音楽ジャンル、演奏法等）
 - ・弾き語りの技術が低い。歌とピアノそれぞれは上達しているが、その二つを同時に演奏する技術が不足している。

5. 今後の目標

- (1)短期的目標
- ・学生の向上心を高めるための指導法について、さらに研究する。
 - ・授業における課題の出し方や内容について精査し、より効率の良い方法を研究する。
 - ・学生一人ひとりのニーズに合わせた指導を実践し、個人の力を高める。
- (2)長期的目標
- ・幅広い音楽のニーズに応えられる教育環境の整備を進める。
 - ・音楽を通して、地域社会との連携を図り、社会とともに発展できる環境づくりに努める。

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

- ・マーチングバンド部の実績
- ・音楽専修の実績

マーチングバンド部における実績(2022)

【入部者数】

2014 年	2015 年	2016 年	2017 年	2018 年	2019 年	2020 年	2021 年
23 名	21 名	30 名	23 名	16 名	28 名	30 名	18 名
2022 年							
23 名							

【就職先】

	2022 年					
教員（幼保含む）	6 名					
公務員	0 名					
企業、その他	5 名					
	2017 年	2018 年	2019 年	2020 年	2021 年	
教員（幼保含む）	7 名	5 名	5 名	5 名	3 名	
公務員	3 名	1 名	3 名	1 名	1 名	
企業、その他	13 名	15 名	22 名	17 名	11 名	

【大会結果】

	2014 年	2015 年	2016 年	2017 年	2018 年	2019 年	2020 年
関西大会	ステージ全国	ステージ全国	金賞 1 位	金賞 1 位	金賞 1 位	金賞 1 位	金賞 1 位
全国大会		審査員特別賞	銀賞 10 位	銀賞 7 位	銀賞 7 位	銀賞 7 位	G.P.賞

	2021 年	2022 年
関西大会	金賞 1 位	金賞 1 位
全国大会	金賞 5 位	銀賞 6 位

【社会貢献】 2014 年～2022 年

*クリスマスコンサート（仙台市仮設住宅）*学校法人奈良学園 50 周年記念式典*奈良学園大学学歌作曲*王子町ミルキーウェイ*平群町時代祭行列*こおりやま音楽祭“楽”
*三郷町給食センター新築記念式典*三郷町新道路開通記念式典*登美ヶ丘フェスタ*飛鳥リレーマラソン*三郷町 2 デイウオーク*三郷キャンパスお花見会*大和川清掃ボランティア*鳥取商業高校吹奏楽部演奏会ゲスト*奈良学園幼稚園夕涼み会*2000 人の吹奏楽ゲスト*赤い羽共同募金オープニングセレモニー*日本人間教育学会シンポジウム*エコパマーチングフェスティバルゲスト*天満警察署防犯パレード*名古屋マーチング&バトンウェーブゲスト*王子町吹奏楽祭*第 32 回国民文化祭なら 2017*まつり in ハワイメインパレード*KCN テレビ出演*ひらかたパークイベント出演*奈良クラブイベント出演*感謝を伝えるコンサート開催*奈良クラブ J3 オープン戦出演

音楽専修における実績

【入学者数】

2018 年	2019 年	2020 年	2021 年
7 名	10 名	18 名	15 名
2022 年			
18 名			

【就職先】

	2022 年
教員（幼保含む）	3 名
公務員	0 名
企業、その他	3 名

【社会貢献】

2018 年	・三郷町 PV「きらきら星」作成・り～べるカレッジ和&輪コンサート
2019 年	・子供フェスティバル出演（近鉄百貨店）
2020 年	・三郷町 PV 第 2 弾「Get Through」制作
2021 年	・音楽でつながろう in NGU（新型コロナウイルス感染症の影響で中止） 代わりに、登美ヶ丘カレッジ「室内楽の調べ」として、教員が開催。
2021 年	・ブランディング広報の取り組み「Get Through ～あなたと共に～」。音楽専修の学生とマーチングバンド部による路上ライブを計画。 （新型コロナウイルスの影響で未実施）
2022 年	・オープンキャンパスにおいて、ピアノによる Well come 演奏を行う。 ・12 月 16 日に 3 号館 1 階において 2 年生がロビーコンサートを開催する。 ・12 月 23 日に 3 号館 1 階において 2 年生がクリスマスコンサートを開催する。 ・1 月 20 日に 3 号館 1 階において 4 年生が卒業コンサートを開催する。

学部・学科	人間教育学部・人間教育学科	氏名	高岡昌子
1. 教育の責任			
本学の建学の精神である「高度な専門学術知識に裏付けられた実践力を有する有能な人材を教育・養成し、地域社会及び社会全体の発達・発展に貢献する」ということを常に意識して教育活動に携わっている。2023年度に担当する授業科目は、「保育原理」「保育の心理学Ⅰ」「子どもと人間関係」「子どもと人間関係の指導法」「教育実習事前事後指導（幼）」「教育実習Ⅰ（幼）」「教育実習Ⅱ（幼）」「教職実践演習（幼・小）」「人間教育学ゼミナール（応用）」「卒業研究」等であり、これらの科目は全て保育者養成に関わる科目である。これらの担当授業では、高度な専門学術知識に裏付けられた実践力を有する有能な保育者を養成することと、どの学生にとっても有益な内容となるように目指して指導を行うように努めている。また私は、本学卒業生が、自分の存在意義を確信し、自己肯定感を持ち、常に多角的に考えて、社会に貢献していきたいと自ら思っ、主体的に行動していくことができるように願って、それらの願いに効果的な教育的関わりができるように努力している。さらに学生たちが幸せな今と未来を生きることができるように常に学生ファーストで学生に関わっている。			
2. 教育の理念・目的			
私は、「現実 に 立脚 した 学術 の 研究 と 教育 を 通 じ て、 明日 の 社会 を 開 く 学 識 と 実 務 能 力 を 兼 ね 備 え た 指 導 的 人 材 の 育 成 を 目 指 し、 時 代 の 進 展 に 対 応 し 得 る 広 い 視 野 と 創 造 性 を つ ち か い、 誠 実 に し て 協 調 性 の あ る 心 身 と も に 豊 か で た く ま し い 実 践 力 を 持 っ た 人 材 を 養 成 す る 」 と い う 本 学 の 教 育 理 念 を 重 要 視 し て お り、 子 ど も を と り ま く 社 会 に お け る 多 様 な 問 題 を 多 角 的 に 捉 え て、 柔 軟 に 改 善 し て い く こ と の で き る 保 育 者 を 養 成 で き る よ う に 日 々 努 力 し て い る。 また私は、本学の使命・目的である「奈良学園大学は、教育基本法及び学校教育法の定めるところに従い、高等学校教育の基礎の上に広く一般教養を授けるとともに、社会に必要な実務能力を備え、自らの目標を達成するための実践力を有する人材を育成するために必要な教育・学術研究の遂行によって、社会の発展に寄与することを目的とする。」ということ を 常 に 意 識 し て、 保 育 の 場 で 実 践 力 が あ り 実 務 能 力 を 備 え た 保 育 者 ・ 教 育 者 の 養 成 に 携 わ っ て い る。			
3. 教育の方法			
・ 「保育原理」の授業で日本国憲法・子どもの権利条約・児童憲章・児童福祉法・学校教育法・教育基本法等について伝え、子どもの最善の利益を考慮した保育をできる保育者を育むために、各法律や条約が作られた経緯について理解を深められるように歴史的事実や事例を説明して指導している。 ・ 「子どもと人間関係」等の授業において、あらゆる子どもについて多角的に理解していくことのできる保育者を育むために、学生が討論しあったり、発表しあったりする時間をもつようにしており、すべての学生の意見を受け止めて、その多様性を認められるように進めている。 ・ 「保育の心理学」等の授業を通して、保育に活用できる発達心理学の基礎的事項を伝え、すべての人間がそれぞれの発達過程にいと捉えて、一人ひとりの人間の心理を理解して保育を深められるように教育する。 ・ 担当する全ての担当授業において、内閣府や厚生労働省、文部科学省等による最新のデータを取り入れて教材をつくるように努めている。 ・ 最新の子どもの関わる社会問題や事故や虐待事件等についても取り上げて、学生自身が考えて意見を言う機会をもつことができるようにしている。 ・ それぞれの学生がより望ましく自己実現して幸せな未来を生きることができるように心から願い、常に学生ファーストで進路指導や就職支援指導を行っている。そして学生一人ひとりが、自分の存在意義を確信し、自己肯定感を持ち、常に多角的に考えて、社会に貢献していきたいと自ら思っ、主体的に行動していくことができるように願って、それらの願いに効果的な教育的関わりができるように努力している。			
4. 教育の成果			
・ 公立採用試験において一層用いられることになると予想しているWebテスト（SPI3等）において、学生が自らの力を一層発揮できるように指導してきた。 ・ 実習にむけて必要な教育を充実させられるように努力してきた甲斐あって、実習日誌等の記述力等、向上してきたように思われる。 ・ 登美ヶ丘キャンパスに移転し、研究室の前にコモンズがあり、学生とのコミュニケーションの機会や質問を受ける機会も多くなり、こまめに指導できるようになった。また、コモンズ近くにピアノがあり、こまめに指導できるため、学生たちのピアノ技術も一層向上してきたと感じている。			
5. 今後の目標			
・ 卒業した後に社会人となって困らないように、社会人そして保育者としての資質向上を目指して、在学中の指導を徹底して行っていきたい。 ・ 進路に関しては、学生一人ひとりの希望を第一に考えて指導を行う。無理のない範囲で、なるべく保育者になりたいと思ってもらえるような指導をしたい。そして、なるべく公立採用試験合格者を増やしていきたい。 ・ 学生一人ひとりの学生生活が幸せで充実したものになるように全力で支援していきたい。 ・ 昨年度はあまりに時間がなく、自分の授業にかけられる時間が足りなかったが、今年度は担当する全ての授業の質を向上させていきたい。 ・ 本学に対する学生の満足度があがるように関わっていきたい。			
・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）			

ティーチングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部・人間教育学科	氏名	長谷川栄子
1. 教育の責任			
(1) 担当授業科目 ①司書教諭免許取得に係る科目 ・ 学校経営と学校図書館 ・ 学校図書館メディアの構成 ・ 学習指導と学校図書館 ・ 読書と豊かな人間性 ②専門科目 ・ 人間教育学ゼミナール（基礎） ・ 人間教育実践力開発演習Ⅱ ・ 教育実習事前事後指導（中・高） ・ 国語科教育法Ⅰ ・ 国語科教育法Ⅱ ・ 教職実践演習（中・高） ③共通教育科目 ・ 文学 (2) 学生支援 オフィスアワー：勤務時間内（8:30～16:30）で研修日と授業時間以外随時			
2. 教育の理念・目的			
・ 人の支えになる人や教員を目指す学生を支援するため、実務経験を活かし、他者への思いやりを忘れず、AI時代において生涯にわたって学び続ける人材を育成する。中等国語専修の一員として教職員と連携し、粘り強く前向きな姿勢で職務に取り組む。			
3. 教育の方法			
(1) 学生との接し方 ・ 先に挨拶の声を掛け、関係づくりを図る。リフレクションシートから授業中の努力を認め、授業態度や提出物の提出状況から学生の困り感を推察し、相談に乗る。以上の2点を心掛けている。 (2) 授業の工夫 ・ 主体的な学修にするために、授業内容や目標を明示し、リフレクションシートの内容を交流して各自の努力を認め、他者からの学びを自覚させている。また、記述力を向上させるためのポイントを示し、レポートが書けるように配慮した。レポートやリフレクション等に対してコメントを付け、個人的にも双方向のやり取りを行っている。そして、授業の事前事後に授業テーマに関連する参考資料を読むことを推奨している。 ・ 対話的な学習にするために、自己学修の時間を取った後にグループでの交流を行い、全体報告し、考えを共有する時間を設定している。多様な言語活動を行い、テキスト、自己、他者との対話が図られるようにした。 ・ 深い学びをめざして、授業で扱ったテーマについてさらに文献で調べ、レポートを書いて自分の考えを表現させるようにしている。 (3) 内外の研修会への参加 ・ 学内における研修会には、欠かさず参加し、ICTを活用した協働的な事務作業の在り方や指導法等を模索した。 ・ 学外の研究会において、国語科におけるICTを活用した効果的な指導法を研究している。 (4) 専門分野における成長 ・ 諸論文を参考にし、昨年度より授業内容を深め、多角的な視点から講義できるよう努力している。 ・ 小学校、中学校、高等学校の国語科の学習内容の系統性や児童生徒の発達段階を踏まえて講義している。			
4. 教育の成果			
(1) 成果 ・ 授業で学生に模擬授業させる場合には、事前指導を重ね、実践させることによって、学生は授業を実践した達成感を味わっている。授業参観の視点を明確に示し、批評会を重ねることを通して、学生たちは、相互に学び合い、授業力が向上した自己を発見していた。 (2) 課題 ・ 1時間の講義内容に関して、さらに専門的な知識を得、発展的な学修ができるよう複数の参考資料を提供する。 ・ よりわかりやすい授業内容の説明を目指す。			
5. 今後の目標			
(1) 長期的目標 ・ 中等国語専修から教員になる学生を一人でも多く育てられるよう、中学校・高等学校の国語科教育の専門性を深めると共に教員採用試験合格に向けた対策を練る。 (2) 短期的目標 ・ 中学校の国語科においてICTを活用した国語科教育法を研究する。			

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

（１）シラバス（奈良学園大学HP参照）

・ 国語科教育法Ⅱ ・ 学校経営と学校図書館

（２）授業アンケート（別添）

・ 国語科教育法Ⅱ ・ 学校経営と学校図書館

（３）学生支援の内容

・ 進路についての相談 ・ レポート作成についての相談 ・ 学校ボランティアについての相談 ・ 教育実習における指導案作成

（４）講師依頼

・ 奈良県読書推進事業企画運営委員会委員長 ・ 奈良県学校図書館担当者研修会講師・ 奈良県子ども読書活動推進フォーラム講演会講師

2022年度

授業評価アンケート(集計表)

開講年度

2022年度

水曜日2時限

長谷川 栄子

国語科教育法Ⅱ

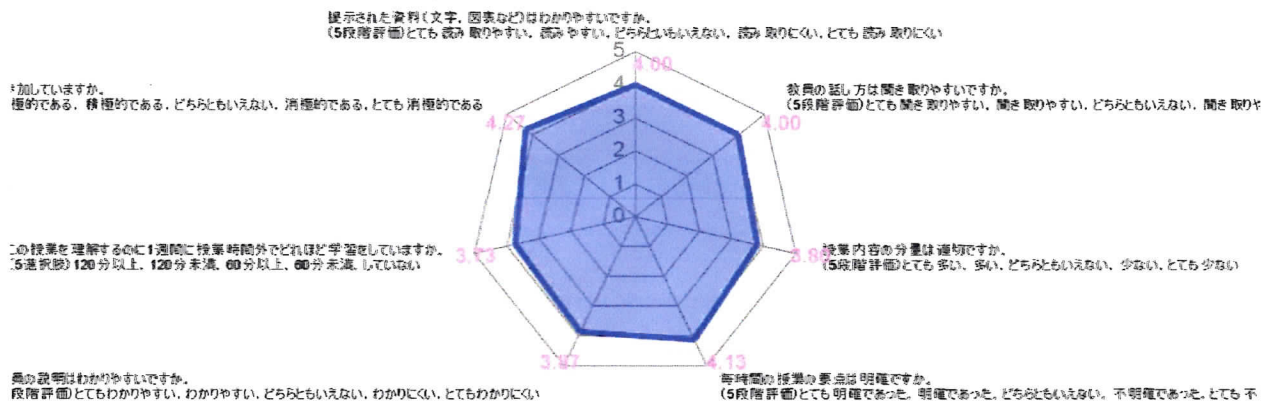
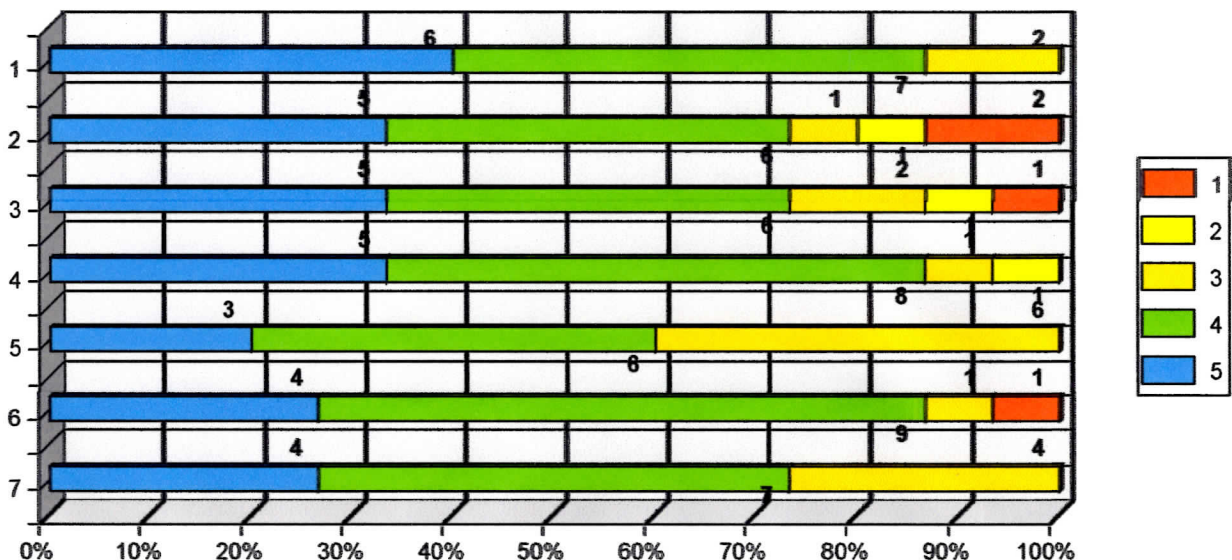
アンケート総数

15 枚

5段階評価	5:5	4:4	3:3	2:2	1:1
-------	-----	-----	-----	-----	-----

1. この授業に積極的に参加していますか。
2. この授業を理解するのに1週間に授業時間外でどれほど学習をしていますか。
3. 教員の説明はわかりやすいですか。
4. 毎時間の授業の要点は明確ですか。
5. 授業内容の分量は適切ですか。
6. 教員の話し方は聞き取りやすいですか。
7. 提示された資料(文字、図表など)はわかりやすいですか。

評価	5	4	3	2	1	平均
集計	6	7	2	0	0	4.27
集計	5	6	1	1	2	3.73
集計	5	6	2	1	1	3.87
集計	5	8	1	1	0	4.13
集計	3	6	6	0	0	3.8
集計	4	9	1	0	1	4
集計	4	7	4	0	0	4



2022年度

授業評価アンケート(集計表)

開講年度

2022年度

水曜日5時限

長谷川 栄子

学校経営と学校図書館

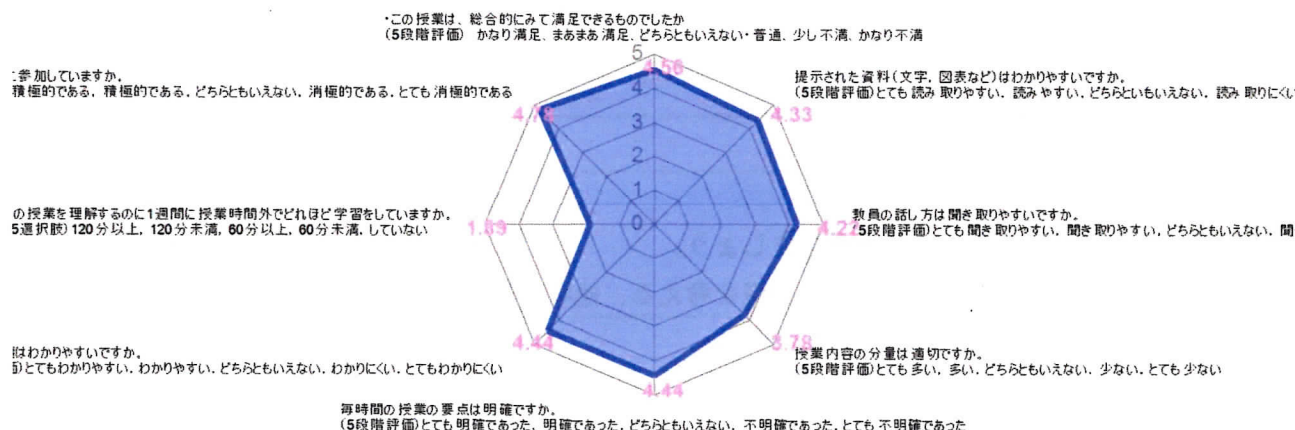
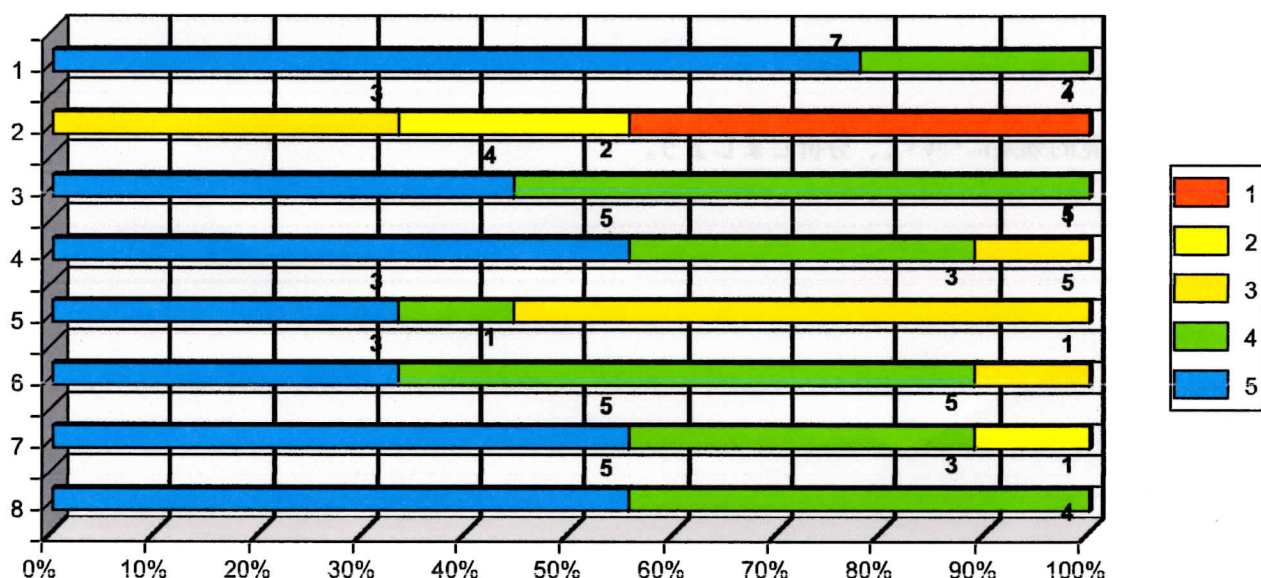
アンケート総数

9 枚

5段階評価	5:5	4:4	3:3	2:2	1:1
-------	-----	-----	-----	-----	-----

1. この授業に積極的に参加していますか。
2. この授業を理解するのに1週間に授業時間外でどれほど学習をしています
3. 教員の説明はわかりやすいですか。
4. 毎時間の授業の要点は明確ですか。
5. 授業内容の分量は適切ですか。
6. 教員の話し方は聞き取りやすいですか。
7. 提示された資料(文字、図表など)はわかりやすいですか。
8. この授業は、総合的にみて満足できるものでしたか

評価	5	4	3	2	1	平均
集計	7	2	0	0	0	4.78
集計	0	0	3	2	4	1.89
集計	4	5	0	0	0	4.44
集計	5	3	1	0	0	4.44
集計	3	1	5	0	0	3.78
集計	3	5	1	0	0	4.22
集計	5	3	0	1	0	4.33
集計	5	4	0	0	0	4.56



学部・学科	人間教育学部	氏名	松井典夫
1. 教育の責任			
○ 担当授業科目 教育課程論A（初等）／教育課程論B（中等）／子どもと表現（図工）／図工科指導法／子どもと表現の指導法 ／現代教育課題C（学校と安全）／特別活動及び総合的な学習の時間の指導法A／教育実習事前事後指導（幼小）／教育実習（小） ／教職実践演習 ○ 各種学生支援 ・硬式野球部部長として、野球部学生のケア、指導を行っている。また、新規入部（入学希望者）の面談を全員実施している。 ・3回生、4回生のゼミにおいて、教員採用試験対策を実施し、採用試験への合格へと進めている。 ・カンボジア短期研修において、3つのプログラム（授業体験プログラム・炊き出しプログラム・命のディスカッションプログラム）を考案、実践した。			
2. 教育の理念・目的			
○ 自らの教育理念と目的 「よき社会人」として、グローバル・パースペクティブを持った教員を育成する。「教師であり続ける」力を育成する。 ○ 価値観・信念 教育はもっともイノベーションが起こりにくい。これは、「古き良き」価値から動かないからである。その視点に立ち、これからの時代を担う学生を育て、これからの時代の教育を見つめ、これからの時代の教師を育てていく。			
3. 教育の方法			
○ 学生との接し方 学生は「ひとりの大人」である。学生を大人として尊重し、自主性を重んじて接していく。 ○ 授業の工夫（授業の方法、内容等） 「つまらない授業はしない」「同じ授業の繰り返しはしない」 そのためには、自身の研究を常にブラッシュアップさせることが大切である。その研究の成果から、理解と関心を促進するプレゼンテーションを作成して授業を進めるとともに、専門的な知識、技能を持って学生の関心を喚起する。また、アクティブ・ラーニングを意識し、深く思考する場面を設定する。 ○ FD/SD活動等にかかわる内外の研修会への参加 FD/SDに関する情報は積極的に収集している。 常に多くの文献、論文、先行研究に触れ、常に自身の研究を深め、広げていく。			
4. 教育の成果			
○ 達成できたこと、できなかったこと（達成レベル） 概ね達成できている。 ○ 授業アンケートの結果 高い評価を得ている。			
5. 今後の目標			
○ 短期的目標 授業評価の結果を受け、とくに授業前の予習の必要性を持った授業内容を構成していく。 ○ 長期的目標 当該教科における最新の動向も盛り込みながら、授業内容のより一層の充実を図っていく。			
・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）			

ティーチングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部人間教育学科	氏名	安東 雅訓
1. 教育の責任			
担当授業科目 ・代数学基礎、・代数学A、・代数学B、・代数学I、・代数学II、・応用数学（代数学）、・基礎ゼミナールII、・人間教育ゼミナールI、・人間教育ゼミナールII、・教育実践力開発演習III その他学生支援 数学道場（2年生, 週1回）、教員採用試験対策講座（4年ゼミ生, 週1回）、数学検定団体受験の実施（年2回程度）			
2. 教育の理念・目的			
数学の点数を取るためには、問題の解き方を覚える方法が簡単です。定義や定理の意味は分からなくても、使い方を分かっていたら良く、理解するのは定理の使い方が分かることを指すのだと思っている学生もいるでしょう。 しかし、教える立場となるためには、解き方を教えられる、では足りず、「なぜ正しいのか」、「なぜ間違っているのか」の疑問に答えられる必要があります。数学におけるその答えは最終的には定義であり、論理です。定義に戻れる、定義を読める学生を育てることを目的としています。			
3. 教育の方法			
数学の演習問題においては、全体に向けて解説と質疑応答をさせる他、「問題の中で初めて定義される知らない計算」が出てくる問題も多く扱っています。また少人数だからできることとして、自身で例を作成させるタイプの、人によって答えが変わる問題も多く扱っています。 演習発表における質疑応答が学生間で上手く回るようにできれば一番良いのですが、それはなかなか難しいため、基本的には私が「疑問に思うべきだと気付いていないであろう部分」に関して質問し、気付きを促しています。 ゼミにおいては、ルールを理解しそれにアジャストすること、ルールを他人に説明すること、の2点ができない、あるいはその経験が足りていない学生が多くいると考えており、ゼミ活動にパズルやボードゲーム（毎回違ったものをゼミ生・教員が準備）を取り入れています。			
4. 教育の成果			
昨年度は教員採用試験を受けたゼミ生3名全員が現役合格という良い結果でした。 授業での演習発表の解説において、書いてあることを読むだけのものから、考え方や何を目的としているかを含めた解説ができる学生が少しずつ増えてきています。			
5. 今後の目標			
ゼミ活動にパズル、ボードゲームを取り入れるということは続けていくつもりですが、特に何が効果的だったのか、の分析は今後の課題かと思えます。 今年度は卒業研究を予定している学生がいるため、今後のゼミ生の参考になる形のものを目指しています。			
・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）			

ティーチングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部・人間教育学科	氏名	岡野 聡子
1. 教育の責任			
1) 担当授業科目 (2023年度) - キャリア形成科目：キャリアデザイン、キャリアディベロップメント、キャリアスキルアップⅠ、キャリアスキルアップⅡ インターンシップ - 教職科目：子どもと環境、子どもと環境の指導法、保育表現力演習 - ゼミ：人間教育学ゼミナール（基礎）、人間教育学ゼミナール（応用） - その他：卒業研究、人間教育学（1コマ）、基礎ゼミナールⅡ（1コマ） 2) 各種学生支援 - 一般企業の就職支援（履歴書指導、面接対策指導、等）の実施 - 幼稚園専修4年生を対象とした公立園面接指導の実施 - 奈良学園大学ボランティアサークル顧問としての学生支援の実施			
2. 教育の理念・目的			
1) 自らの教育理念と目的 - 自らの教育理念は、理論と実践の統合を意識した教育活動の推進である。 - キャリア形成科目における教育活動の目的は、職業観や勤労観の醸成に限らず、心理学・社会学・教育学・社会福祉学・経済学・政治学等からの知見を取り扱い、人生100年と呼ばれる時代をどのように生きるかについて個々人に考えさせることである。 - 教職科目における教育活動の目的は、現場で保育活動ができるようになる実践力の開発である。 2) 価値観・信念 - 学生と教員の双方向的関係性に基づいた授業づくりを大切にしている。			
3. 教育の方法			
1) 学生との接し方 - 学生の話は、最後までじっくりと聞く。聞いた後、観点を整理して問題を構造化し、具体的な解決策を提示する。 2) 授業の工夫（授業の方法、内容等） - キャリア形成科目では、アクティブラーニングを取り入れている。2年生、3年生の後期には、社会変革をもたらすビジネスアイデアコンテスト等に応募させるなど、学生自身が考えたアイデアが社会でどの程度通用するか、学生自身が楽しみながら挑戦をする機会と環境の設定を行っている。 - 教職科目では、実践力を養うために、保育理論、保育方法論といった基礎理論を学んだ後、保育教材の開発や指導計画の立案、保育実践をさせ、相互評価、自己省察から学びを深め、学びの定着を図っている。 3) FD/SD活動等にかかわる内外の研修会への参加 - 広陵町教育委員会・教育委員として、教育活動に関わる研修会に参加している。 - 園内保育の講師として参加し、保育現場の実態を把握している。 4) 自らの専門分野の成長 - 日本保育学会、キャリア教育学会、日本地域福祉学会、日本教師学会等に入会し、研究発表を行っている。			
4. 教育の成果			
1) 達成できたこと、できなかったこと（達成レベル） - キャリア形成科目では、授業の振り返りや授業評価アンケートを見ると「視野が広がった」「自分を見つめ直す機会となった」等の回答が多く、授業の主目的は概ね達成できていると思われる。達成できなかったこととしては、毎年のものであるが、レポート作成において、自己の考えと引用部分が明確でないものが多く、書き方の指導が必要である。教職科目（子どもと環境（1年次後期））では、グループにて教材開発を行った。グループ活動では、各人に役割意識をもたせて参加をさせるため、フリーライダーはおらず、全員が教材開発の取り組みに関わったことを確認した。できなかったことは、特にない。 2) 授業アンケートの結果 - 各項目について、おおむね学内の平均値を上回っている。			
5. 今後の目標			
1) 短期的目標 - 学生からの授業の振り返り・質問を活かすなど、双方向的関係性に基づいた授業づくりを行う。 2) 長期的目標 - キャリア形成科目にて、教育効果測定（グループワークの成果、協同性尺度等）を行い、量的側面から学生の何の能力が向上したかを明らかにしたい。			

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

- ・ いくつかの科目についてのシラバス：本学W e bサイトに公開されているシラバスを参照のこと。
- ・ 各種学生支援の内容：キャリアセンター運営委員の立場から、学生の就職支援を行っている。
- ・ 研修会や学会への参加状況：2022年度は、日本地域福祉学会、日本保育学会、読書科学学会、日本教師学学会にて学会発表をしている。
- ・ いくつかの科目についての授業アンケート：本学W e bサイトに公開されている授業評価アンケートを参照のこと。

ティーチングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部	氏名	岡野 由美子
1. 教育の責任			
・担当授業科目 特別支援教育総論、知的障害者の教育課程論と指導論、発達障害教育総論、特別支援A（初等）、特別支援B（中等）、現代教育課題A（不登校・いじめ）人間教育実践力開発演習Ⅳ、教職表現力演習Ⅱ、教職実践演習、人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）、人間教育学ゼミナールⅡ（応用）、卒業研究 ・各種学修支援 学生支援センター運営委員・学生委員会委員 学生支援センター所管の学生相談について、令和３年度まで、三郷キャンパスの学生相談を担当していたが、本年度からカウンセラーが2名配置となった。学部教員とカウンセラーの連携を円滑にするため、月1回の連絡会を実施し、運営を行なっていく。キャンパス統合における学生の不安や慣れない環境への適応などに預く学生も想定し、丁寧な対応を行なっていく。 本学は教員を目指す学生が多く、教員採用試験に向けた面接練習、模擬授業練習等、オフィスアワーには個々への指導を実施する。その他学生の就職に関する相談や情報提供は丁寧に行なっていく。			
2. 教育の理念・目的			
1)教職を目指す学生の育成を目的とする。様々な教育課題を知り、それに主体的に取り組む実践的な力を育む。 2)すべての教育現場で実施される特別な支援を要する児童生徒への指導、支援についての知識をつけ、その多様性に対応する力をつけさせる。まずは自分自身を理解すること、そして独りよがりにならず、自他の違いを認め、お互いを尊重するということを日々の教育活動全般を通じて学生に伝えていく。 主に上記の2点を重視している。			
3. 教育の方法			
<学生との接し方> 学生が自己理解を進め、卒業後の進路に向かい目標をもち主体的に学修を進めていくために、まずは学生の話を傾聴し、状況を把握して指導支援にあたることが重要であると考えている。大学が最後の教育を受ける機会である学生も多く、卒業後は自立し社会人となっていく。自ら、自分の個性と向き合い、何が得意か、何を目指しているのかを見つめること、そして、様々な課題に自力で向かうと同時に周囲の力を借りること、それによってより良い結果が得られるということに気づかせるような支援を丁寧に行う。学生の話を傾聴しながら自己を振り返らせる作業を通して自覚的に気づかせていく。 <授業の工夫> 方法が分からない、取り組む道筋を具体的に描けず成績が伸びない、力がつかない等のことがないように、すべての授業において、評価のポイントを示すなど細かな指導、支援に取り組んでいる。 さまざまな教育課題に立ち向かい、対処していく教員を育成する立場として、主体的・対話的な学び、ディスカッション等さまざまな形態の授業を構築し、自ら学ぶ意欲を高め、他者と連携する力をつけさせる。 特別な支援を要する幼児児童生徒への対応は、学校現場では喫緊の課題である。その理論や実際の支援についての理解に重点を置き、勤務先で応用できるような実践力の育成に努めている。 <FD/SD活動等に関わる内外の研修会への参加> 学内研修会への参加、研修で得た情報を取り入れた授業の構築を行っている。 <自らの専門分野における成長> 特別支援教育に関する学会等への参加、日本LD学会では広報委員会副委員長を務め、最新情報や取り組みについて取材、啓発活動にも貢献している。これらの取組から得た知識や情報は授業に反映するようにしている。			

4. 教育の成果

各授業における提出課題、リフレクションにおいて、ポイントを整理して書くことができるような力をつけてきている。双方向の授業を心がけており、リフレクションにおける感想や質問についてのフィードバックは次週の授業時に必ず行なっている。

ゼミ生以外の学生も、自ら、進んで質問をしてきたり研究室を訪ねてくるケースも増え、信頼関係を築くことができていると考えている。2022年度の前期授業評価については学生の総合的な満足度は「現代教育課題A（不登校・いじめ）」では4.2、「教職表現力演習Ⅱ」では4.6、後期授業については、「発達障害教育総論」では4.6、「知的障害者の教育課程論と指導論」では4.6であった。授業の事前に予習課題を与えるなど、当日の授業に主体的に取り組めるような工夫を行ったが、授業評価では、授業アンケートでは授業時間外での学習を行なっていたかという項目の評価が他の項目に比べ若干低い数値となっている。今後は、事前学習とともに事後の学習についてもどのような取り組みをすればよいかなど具体的な方法や内容についても指導支援を行なっていく。

5. 今後の目標

今年度も、専門である特別支援教育に関する授業が開講している。

特別支援教育は、すべての教育機関で実施される大切な教育である。それぞれの障害について、正しく理解し、学ぶことが、将来の教育現場で生きて働く力となることを踏まえ、わかりやすい授業を実施する。また、学生相互に意見を交流したり、自ら調べたりする中で、新たな疑問をもったり、それについて調べたり学んだりすることができるよう、具体的な方法を示すなど、学ぶための方略を身につけることができるような授業を実施したい。

学生支線センターの学生相談については、専門の心理士を配置された。連絡会を立ち上げ、月に一度状況の共有を行うなど学生と相談員の橋渡しや、情報の共有等連携をとりながら進めている。今後も引き続き、よりよい相談体制について協議し整備していく。

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

・ シラバス及び授業アンケートは本学HPに公開されている。

ティーチングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部人間教育学科	氏名	岡村 季光
1. 教育の責任			
・担当授業科目 発達・教育心理学 [A (初等) / B (中等)] , 教育相談の理論と方法 A (初等) / B (中等) , 子ども家庭支援論, 子どもの理解と援助, 人間教育学ゼミナールⅠ (基礎) , 保育実践演習 ・各種学生支援 乳幼児教育専修長として, 専修内全体のとりまとめを行っている。			
2. 教育の理念・目的			
・自らの教育理念と目的 奈良学園大学人間教育学部のアドミッションポリシーである「社会の中で一人の人間」として生き抜く力となる豊かな「人間力」を基盤とする, 柔軟な「教育力」と高度な「実践力」を備えた「教育者」 (広く社会の教育活動にかかわる人材) の養成 ・価値観・信念 大学生は青年期後期という発達段階にあり, かつ成人を迎える者であるという認識に立ち, 学生とかかわる。			
3. 教育の方法			
・学生との接し方 大学生を大人としてかかわる。また, 自主性を重んじるとともに学生として果たすべき責任を遂行することを求める。 ・授業の工夫 (授業の方法, 内容等) 講義系の科目は必ず毎回の授業の見通しを持ってもらうために, 必ずレジュメを作成し, PowerPointを用いてできるだけ例を多用しながら授業を進める。 ・FD/SD活動等にかかわる内外の研修会への参加 FD/SDに関する情報は積極的に収集している。 ・自らの専門分野の成長 常に最新の動向をつかむため, 心理学系の学会には毎年必ず参加する。			
4. 教育の成果			
・達成できたこと, できなかったこと (達成レベル) 前年度における定期試験の正答率を基に, 毎年授業内容の見直しを行うが, 未だ発展途上にある。 ・授業アンケートの結果 各項目について, おおむね学内における平均値付近であった。			
5. 今後の目標			
・短期的目標 前年度の結果を受け, 特に授業後の復習について充実を図ることを目指す。 ・長期的目標 当該教科における最新の動向も盛り込みながら, 授業内容のより一層の充実を図っていく。			
・ 必要に応じて根拠資料を添付 (シラバス, 授業評価アンケート等)			
・いくつかの科目についてのシラバス 本学Webサイトに公開されているシラバスを参照のこと。 ・各種学生支援の内容 Active Academyに登録されている指導記録を参照のこと。 ・研修会や学会への参加状況 毎年複数回研修会や学会に参加を行っている。最近では従前の対面開催に戻りつつあるため, 対面の場合直接会場に行き参加している。 ・いくつかの科目についての授業アンケート等 本学Webサイトに公開されている授業評価アンケートを参照のこと。			

学部・学科	人間教育学部	氏名	岡本恵太
1. 教育の責任			
・国語科指導法 ・教育社会学A（初等） ・教育社会学B（中等） ・社会学 ・人間教育実践力開発演習Ⅳ（複数担，主担当） ・言葉の理解 ・人間教育学ゼミナールⅠ（基礎） ・人間教育学ゼミナールⅡ（応用）		・卒業研究 ・教育実習Ⅰ ・教育実習Ⅱ ・進路相談 ・履修相談 ・教員採用試験直前対策講座（主担当）	
2. 教育の理念・目的			
教師に必要な資質・能力としてのコミュニケーション力、企画力、行動力、課題解決力などの人間力を培うことを目標としている。そのために、次の4点を特に重視する。 ①現場での実践を想定し、具体的な方法や筋道を提示する。 ②実践に生きる形で、理論や考え方を提示する。 ③学生の問題意識に応じた研究を支援する。 ④人間教育学部で培ってきた、コミュニケーション力や実践力、知識を総合するよう働きかけ、教員採用試験における個人面接、場面指導、模擬授業に生かせるようにする。			
3. 教育の方法			
(1) 学生との接し方 普段から、学生とのコミュニケーションの機会を多くとるよう心がけた。生活や学習上の悩みを聞き取り、共に方向性を見出すようにした。また、必要に応じて、家庭と連携を取り履修支援にあたった。 (2) 授業の工夫 授業で提示するスライドを工夫し、考え方の筋道を目で見てわかるようにして理解を支援した。社会学の授業では「なぜ、高学年になるほど発言する児童が減るのか」と		いった実践的な課題を提示し、社会的な見方考え方が実践にどう生かせるかを示そうとした。論文やレポート等の指導にあたっては、できかぎり個別指導の場を設定するようにした。を設定した。 (3) FD/SD活動等にかかわる内外の研修会への参加 3校の小学校の校内研究会に講師として参加し、最新の教育動向や現場の先生方の工夫について学び、（情報の保護には十分配慮したうえで）授業に生かすよう心掛けた。 (5) 学生のニーズに応じた進路指導 開発演習Ⅳ等において学生のニーズや課題を聴き取り、一人一人が自信を持って面接等に取り組めるよう働きかけた。	
4. 教育の成果			
教員の熱意やプレゼンテーション等資料の分かりやすさについては、おおむね効果があったと考える。一方、授業時間外の学習などを促すことには課題がある。		進路指導については、ゼミ生のうち一般企業への就職を希望する者全員の内定が確定した。教員採用試験については、直前対策講座を受講した学生たちは確かな手ごたえを感じている。	
5. 今後の目標			
1) アクティブラーニングを意識し、主体的な学習を促すこと。 ・授業の中において、教育実践に直結する課題について議論する場を設定する。 ・ICT機器（ロイロノート）の活用を試みる。		2) 学生一人のニーズに応じた、進路指導やゼミにおける個人研究支援、卒論指導を実施する。 ・ゼミ3回生の研究に関する問題意識の喚起と、追求の支援。及び、4回生の研究の教育実践的な意義を明確にさせていくこと。	
・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）			
・国語科指導法シラバス（シート2） ・教育社会学（A，B共通）シラバス			

ティーチングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部・人間教育学科	氏名	鍵本 有理
1. 教育の責任			
担当授業科目 ・国語学入門 ・国語学Ⅰ ・国語学Ⅱ ・国語科教育法Ⅲ ・国語科教育法Ⅳ ・国語学特論 ・基礎ゼミナールⅡ ・教職表現力演習 ・教職表現力演習Ⅱ ・人間教育実践力開発演習Ⅲ ・語学・文学総合演習Ⅰ（国語学） ・日本語教育実習事前事後指導(不開講) ・日本語表現Ⅳ（不開講） 各種学生支援 ・勉強の仕方（ビジネスにおける効率化を参考としたスケジュール管理やファイリングの手法、大学教育としてのアカデミックスキル） ・（専門分野と関連した指導）わかりやすい文章の書き方、研究指導 ・その他学生相談			
2. 教育の理念・目的			
大衆化した大学において、今こそ大学での学びとは何か、考える必要がある。研究者志望ではない学生にとっても、大学における本来の学問に触れる経験は有意義であり、高校とは違って、自ら考え、動くことを身につけさせ、豊かな人間性を育みたい。 特に、専門の国語学という学問を通じて、何事にも興味を持ち調べる能力を養い、場合によっては定説をも疑うこともできる学生が育てられれば本望であると考えている。			
3. 教育の方法			
教員の研究内容とこれまでの高等専門学校における教育経験（担任・教務や学生等各種委員会・国語科教育・学生相談室・図書委員会指導・学科主任等）を生かし、 ・学生に対しては、「生徒」から「学生」へのステップを意識した接し方をする（自ら動く・情報管理能力を身につける） ・授業では身近にある用例を多く紹介することで言葉の面白さに気づき、調べられる力を涵養、複数の文献を参照しレジュメを作成、発表することで何が正しいかを考える、現代の「メディアリテラシー」にも通じる教育を行う ・校内におけるFD/SD活動はもちろん、各種研究会等にも参加し、教育現場の情報収集にも当たっている ・大学の講義を通して、自らの国語学の知識を見直し、研究にも役立てる ・古典文学の知識についても折に触れ講義し、学生が教育現場で生徒の興味を引く教材を作成できるようにする			
4. 教育の成果			
・学生との対話において、言葉のさまざまな現象について「おもしろい」との感想を得られた その一方で、着任1年目であり自身の知識が十分でない科目も3科目担当していたため、授業準備が万全でなかった面がある（少人数の授業が多く、そのような大学の制度により自らの力不足を補えた感がある） ・授業アンケートについては、中間アンケートの要望（用例や説明の補い等）をふまえ、実施後説明等を意識して行った結果、前期末には特に不満はなかったようである。後期は総合的評価の値が4.0/5.0であり、一定の評価を得られた			
5. 今後の目標			
まずは自らの研究環境を整え、講義を通して専門的知識を見直す。その上で、大学における研究を進め、学生にもその成果を還元する。 国語教育は専門ではないが、自身の経験から、学生が仕上げてきた授業案や教材の評価は可能なため、その点を生かし学生の教育に貢献できるようにしたい。専門性を生かし、学生に教材研究に必要な文学・語学の知識を身につけさせることを目標とする。 長期的には、一時中断していた語法の研究を再開し、10年後には成果を出せるようにする。			

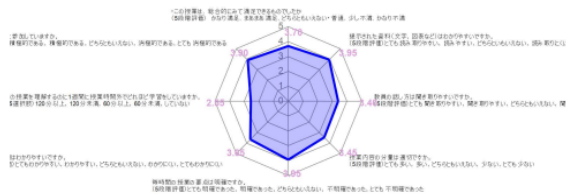
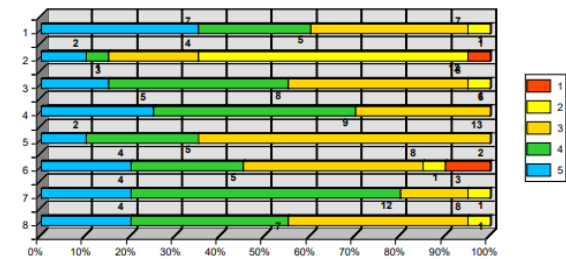
・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

・ 担当科目のシラバスを参照されたい。

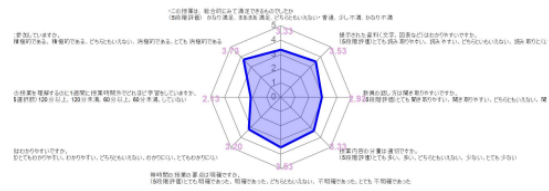
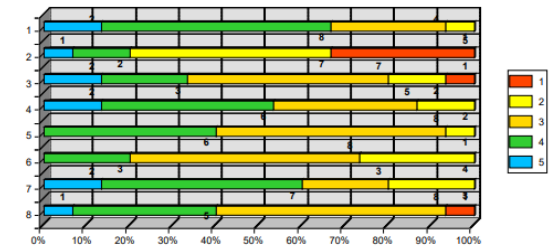
・ 学内各種研修会のほか、上記文化庁の国語問題研究協議会・数年ぶりに対面で開催された萬葉学会・萬葉語学文学研究会・国語語彙史研究会・関西大学国文学会等に参加

【授業アンケート結果】

2022年度		授業評価アンケート(集計表)						
開講年度	2022年度	木曜日4時限		健本 有理				
教職表現力演習								
アンケート総数		20 枚						
5段階評価	5.5	4.4	3.3	2.2	1.1			
		評価	5	4	3	2	1	平均
1. この授業に積極的に参加していますか。		集計	7	5	7	1	0	3.9
2. この授業を理解するのに1週間に授業時間外でどれほど学習をしています		集計	2	1	4	12	1	2.55
3. 教員の説明はわかりやすいですか。		集計	3	8	8	1	0	3.65
4. 毎時間の授業の要点は明確ですか。		集計	5	9	6	0	0	3.95
5. 授業内容の分量は適切ですか。		集計	2	5	13	0	0	3.45
6. 教員の話し方は聞き取りやすいですか。		集計	4	5	8	1	2	3.4
7. 提示された資料(文字、図表など)はわかりやすいですか。		集計	4	12	3	1	0	3.95
8. この授業は、総合的にみて満足できるものでしたか		集計	4	7	8	1	0	3.7



2022年度		授業評価アンケート(集計表)						
開講年度	2022年度	月曜日1時限	健本 有理					
国語学入門								
アンケート総数		15 枚						
5段階評価	5.5	4.4	3.3	2.2	1.1			
		評価	5	4	3	2	1	平均
1. この授業に積極的に参加していますか。		集計	2	8	4	1	0	3.73
2. この授業を理解するのに1週間に授業時間外でどれほど学習をしています		集計	1	2	0	7	5	2.13
3. 教員の説明はわかりやすいですか。		集計	2	3	7	2	1	3.2
4. 毎時間の授業の要点は明確ですか。		集計	2	6	5	2	0	3.53
5. 授業内容の分量は適切ですか。		集計	0	6	8	1	0	3.33
6. 教員の話し方は聞き取りやすいですか。		集計	0	3	8	4	0	2.93
7. 提示された資料（文字、図表など）はわかりやすいですか。		集計	2	7	3	3	0	3.53
8. この授業は、総合的にみて満足できるものでしたか		集計	1	5	8	0	1	3.33



(自由記述) 対話的な授業展開がよい・活動が間にあることで、経験から考えることができる 等☒

ティーチングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部人間教育学科	氏名	川端咲子
1. 教育の責任			
主に、国文学に関連する授業を担当。国文学関連では文学史を中心に授業を行う。教職表現力演習に関しては、学生の基礎学力向上のため特に「読む・書く・発言する」ための取り組みを行う。 ・基礎ゼミナール（通年） ・教職表現力演習・教職表現力演習Ⅱ（通年） ・人間教育実践力開発演習Ⅳ（通年） ・国文学入門（前期） ・国文学Ⅰ（後期）国文学Ⅱ（前期） ・国文学特論（前期） ・文学（前期） ・語学・文学総合演習Ⅱ（後期）・人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）（通年）			
2. 教育の理念・目的			
幅広い視野を持つ人間として社会に出る学生を育てることが教育目的である。そのためには、大学の４年間で広く深い知識を獲得し、獲得した知識をもとに様々な事象の中から問題点を発見し、自ら探求する力を身につける事が重要であると考えている。 近年アクティブラーニングの重要性は教育の場における当然のこととなっている。この点について全く意義はない。ただし、しっかりとした知識のインプットがあってこそそのアウトプットであるというのが私の価値観であり信念である。			
3. 教育の方法			
（授業の方法）日本文学は古典文学、近代文学、現代文学と区分される。中学高校の教材として扱われるのは圧倒的に近代・現代文学が多いが、授業で取り扱うのは古典文学を中心としている。理由としては以下のことが挙げられる。①自身の専門が古典文学であること。②近代・現代文学に比べて、古典文学の世界を知るためにはより多くの手助けが必要であること。③文学の歴史という点では古典文学の時代は近代・現代文学の時代を遙かに上回る長い期間であること。④高校までの教育を考えた場合、古典文学の方が未知の世界が広がっていること。 一例として、「国文学Ⅱ」では、連歌・俳諧・俳句の成立と展開を説明する講義を行った上で、それぞれの作品を鑑賞するという授業を行った。連歌・俳諧という高校までの国語では触れないであろう文学ジャンルをあえて取り上げ、古代から近代までの展開を伝えることで、日本文学の奥行きを深さを理解して欲しいという意図による。また、高校までに必ず授業で取り上げられる俳句が連歌・俳諧を踏まえていかにして誕生したのかを説明した。古典文学が単に古いものなのではなく、現代の文学に繋がるものであるということを、しっかりと伝えることができたのではないかと考える。 （内外の研修会）特になし （自らの専門分野の成長）古典文学の中では一番新しい時期にある近世文学を専門とする立場として、文学の伝播と受容について考えることが多かった。			
4. 教育の成果			
学生にとっては未知のジャンルを紹介することで、自分たちが知っている古典文学がすべてではないことは理解できたと思う。またいくつかの作品に対しては現代の人間の思考と似たことがあることに気づいた学生も少なからずいた（授業後の課題での記述より）。ただし、インプットを重視しすぎたためにアウトプットがほとんどできなかったことは大きな問題点であった。 また、人間教育実践力開発演習Ⅳの授業中ならびに課外に論文指導を行ったが、ほとんど書く訓練を続けてきていない学生に対して、有効な指導方法を模索する必要があることを実感した。その中で、2023年度は、「教職表現力演習」（通年）で「書く力」の育成に特化した授業を人間教育学科1年生全員に対して国語専修教員で担当した。この成果がどうであるかを見極めて、引き続き「書く力」獲得のための方法を模索していきたい。			
5. 今後の目標			
2023年度の授業を終えて。昨年度同様、国文学の授業すべてにおいて、知識の獲得と問題点の発見力・探求力の獲得を両立させる方法を探っていくことが今後の課題である。しかし国語の教員を志望する学生に対して、「国文学」の知識を与えなおかつ発見力・探究心の獲得をさせるには、授業時間が少なすぎるのが現状である。3年生以上には「国文学」そのものの授業はほとんどない。2年間の授業をいかに有効に進めていけるのかは今後の課題といえる。「人間力」を高めるという学科の学習理念に対して日本文学、特に古典文学をどのように活用していくのかを考えていきたい。教員を養成する大学の教員としても、近世文学研究者としても「なぜ古典を学ぶのか」という問いに対して古典を学ぶことの必要性を主張できるような授業を考えていかなければならない。			
・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）			
・「教職表現力演習」2023年度シラバス ・「文学」2023年度前期シラバス ・教員採用試験のための小論文指導を時間外に実施。 ・2023年6月10日・11日、11月5日・6日 日本近世文学会参加			

ティーチングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部・人間教育学科	氏名	澁谷 友和
1. 教育の責任			
1.担当授業科目（2022年度後期） 社会の理解（月1・2限） 人間教育実践力開発演習Ⅱ（木1限：共同） 教育実習事前事後指導（木3限：共同） 人間教育学ゼミナールⅠ（社会科教育：火2限） 基礎ゼミナールⅡ（金1限：共同） 教職表現力演習Ⅱ（金2限：共同） 単独で講義を行っている社会科指導法では、小学校現場でも展開されている個人⇒グループ⇒全体⇒個人ふり返りの学習形態を取り入れ、主体的で対話的な深い学びの授業スタイルを体験的に学べるように工夫している。 また、人間教育学ゼミナールⅠ（社会科教育ゼミ）では、論文通読やフィールドワーク、PBL学習など社会科の教員として重要な資質・能力の基礎を身につけることができるよう工夫している。 2. 各種学生支援 2022年度は、広報委員として、主にオープンキャンパスの業務に取り組んだ。オープンキャンパススタッフの学生としっかりと打ち合わせを行い、新校舎の案内等、学生自身が大学のよさを伝えられるように支援を行った。			
2. 教育の理念・目的			
奈良学園大学の教育理念と、学校現場での教育の指針である学習指導要領に基づき、以下の3点を重視し、教育者となる学生の指導にあたる。 1. 授業実践力の育成 2. 子どもに寄り添える力の育成 3. 予測困難な時代を生き抜くための「主体的」「協働的」に学ぶ力の育成			
3. 教育の方法			
2で示した3つの力を育成するために、社会科指導法、人間教育学ゼミナールⅠの中で、以下の点を工夫しながら展開している。 1. 社会科指導法の講義では、講義方法を習得⇒探究⇒活用という探究型の授業構成にし、学生が主体的に学ぶ環境を整えている。また、内容面では、小学校現場での経験を活かし、学生が実習や新任として現場に立つことを想定した実践的な内容に精選し、即戦力としての実践力を育成する講義を展開している。 2. 人間教育学ゼミナールⅠ（社会科教育ゼミ）では、社会科教育学に関連する論文の通読を行い、社会科の授業構成の基礎を学んでいる。また、授業を構成するための地域素材を探すため、大学近郊にある長弓寺およびくろんど池のフィールドワークを行い、地域素材をどのように教材化するのか考える取り組みも行った。さらに、現在の教育現場で取り組まれているPBL型の授業構成を学ぶため、天理大学附属天理参考館との博学連携にも取り組んだ。2023年度は5月に神戸方面のフィールドワークを予定している。人と防災未来センターおよび震災メモリアルパーク、旧居留地において震災時の様子を調査する中で、防災教育のあり方を考える取り組みを行いたい。			
4. 教育の成果			
2022年度の授業評価アンケートから、社会の理解の講義の成果を考察する。 1. この授業に積極的に参加していましたか：この項目では、平均4.5となっており、学生が主体的に学習に取り組めた結果が出ている。 2. この授業を理解するために授業時間外の学習を行っていましたか：この項目では、大学の講義全体の平均より上回っており、本講義に対する学生の積極性を伺うことができる。 3. この授業は、内容や要点がわかりやすい展開でしたか：この項目では平均4.7となっており、昨年度の同講義よりポイントを上げることができた。これは、昨年の講義をブラッシュアップし、より充実した内容にできたからだと考えている。 4. 教員の説明の仕方、話し方、提示資料は適切でしたか：この項目においても平均4.7となっており、説明の仕方、話し方、資料の提示の仕方など、小学校現場ですぐに取り入れられるように事例を交えて講義を行ったこと、学生の表情を見ながら進める速度を調整するというような配慮を行った成果だと思われ、自分自身、講義の進め方に自信を持つことができた。			
5. 今後の目標			
今後の目標としては、今回のアンケート結果に甘えることなく、各講義の内容のブラッシュアップを行いたい。そのためには、自身の研究を深めることが必要となるため、学会発表、学会論文投稿、紀要論文投稿、書籍の原稿（共著）等、研究の成果をしっかりとまとめていきたい。 また、前年度から採択されている科研費での研究「未来をデザインする力を育む初等社会科「未来探究学習プログラム」の開発」を推進し、研究成果を公開していく。本年度は、東大阪市の小学校において、小学校の教員・児童、地域、企業等の三者を交えた「地域のありたい未来デザイン」を考えるワークショップを含めた社会科授業のあり方を検討していく予定にしている。			
・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）			

ティーチングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部	氏名	高橋 千香子
1. 教育の責任			
主として保育士資格および幼稚園教諭免許取得にかかわる科目を担当している。臨床心理士として児童家庭相談に従事していた経験を生かし、子どもの心理発達、保育相談、子育て支援などを学ぶ科目を担当している。令和4年度に単独で担当した専門科目は「幼児教育相談支援」、「子ども家庭支援の心理学」、「子育て支援」であり、保健医療学部リハビリテーション学科の専門科目である「臨床心理」も担当している。この他、専門演習科目の「教育実践演習（幼）」や、本学独自に設定されている演習科目の「人間教育実践力開発演習Ⅱ」を担当している。保育者として必要な知識や思考力、学校支援ボランティアを通した対応力、総合力としての保育実践力を育成している。 学生支援では、臨床心理士および公認心理師有資格者として、令和3年度まで本学の学生相談室カウンセラーを担当していた。主な対象は保健医療学部の学生であったが、必要に応じて人間教育学部の学生の相談にも応じ、青年期の心の問題に対して常に高い関心を持っている。			
2. 教育の理念・目的			
まず、本学の教育理念にある「誠実で協調性のある、心身ともに豊かでたくましい実践力を持った人材」を育成したいと考えている。具体的には、一人一人の子どもや保護者と専門家として誠実に向き合い、さまざまな体験の中で喜びだけでなく苦しみにも共感し、発達促進的に関わり、共に成長していける保育者を養成したい。また、良い時も悪い時も自らの状況を受け止められる心の柔軟性をもった人になってほしいと考える。そのために、生涯を通して、変化を怖れず、学び続けることのできる人材を育成したいと考えている。			
3. 教育の方法			
学生とはつねに誠実に向き合い、学生の話をよく聞くことを心がけている。授業では教授内容が学生にきちんと伝わっているか、学生の視点を持ちながらすすめるようにしている。学生に伝わる言葉を考え、質問に対しては丁寧に応答するとともに、学生自らが考え、答えを導き出すことができるよう心がけている。パワーポイントや資料についても、見やすさを考えて作成している。 授業における工夫としては、「幼児教育相談支援」「子育て支援」では、教育相談や子育て相談、児童虐待の場面等の事例をもとに、保育者として適切な理解と関わりのある方について全員で考える事例学習を重視している。まず、自分がその立場だったらどのように感じ、考えて行動するかを各自で考え、文章にした後、隣同士やグループでディスカッションし、最後に全体に向けて発表する。この方法により、他者の多様な考えを知り、自らの考えと照らし合わせることで、保育者としての思考力や対応力を高めることができると考えている。カウンセリングを学ぶ単元では、3人一組になり、ロールプレイを通して「相談者」「保育者」「観察者」を体験し、振り返ることを通してメタ認知を賦活させ、自己理解を深めるとともに実践力につながるよう工夫している。このように、授業では思考することや対話を通した学びを重視している。 また、臨床心理士・公認心理師として自らのスキルの維持向上に努めるため、大学教員の傍ら子ども家庭相談の臨床実践を継続している。学会やセミナー、複数の定期的な研究会や勉強会に参加し、自ら学び続けることを実践している。			
4. 教育の成果			
授業評価アンケート（5点満点）は、「幼児教育相談支援」（前期）は、総合的満足度は4.53、「子育て支援」（前期）では、「教員の話し方の聞き取りやすさ」が最も高く4.35、次いで「説明の分かりやすさ」「毎時間の授業の要点の明確さ」がともに4.24であった。「子ども家庭の心理学」（後期）では、「教員の話し方の聞き取りやすさ」が最も高く4.33、次いで「説明の分かりやすさ」「授業の要点の明確さ」がともに4.28であった。教育方法についてはほぼ達成できたと考えている。今年度はコロナの影響で、学生同士がディスカッションする時間を十分取ることができなかった。対話による学習をどのようにすすめていくか、今後の課題である。			
5. 今後の目標			
短期的目標は、事例学習において、テキストや資料に掲載された事例だけでなく、昨今の保育現場でよく出会う、時代の変化に即した事例をより多くリサーチし、学生に提示したいと考える。また自らの臨床実践の経験を、より学生に伝わるように話すにはどうすればよいか、教員としての表現力を高めていきたいと思う。 長期的目標としては、保育現場の求める保育者の資質や能力、およびそれらの養成方法を研究し、授業内容や学生支援に生かしていきたいと考えている。			
・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）			
・シラバス、授業評価アンケート（シラバスはアクティブアカデミー内にあるため添付は省略します） ・学会、セミナー、研究会、勉強会への参加状況・・・令和4年度は、学会参加は2回、そのうち発表を1回行った。セミナー1回、継続研究会10回、継続勉強会6回参加（案内の文書等はなし）			

学部・学科	人間教育学部（音楽専修）	氏名	辻井 直幸
1. 教育の責任			
○担当授業名 ・音楽科教育法Ⅰ・音楽科教育法Ⅱ・音楽科教育法Ⅲ・音楽科教育法Ⅳ ・楽典・作曲基礎・作曲応用・人間教育開発演習 ・基礎ゼミナール・人間教育ゼミナール・教育実習事前事後指導・教職実践演習 ○授業外活動 ・教員養成のための支援授業（GT）・クラブ活動・行事活動			
2. 教育の理念・目的			
○音楽教育は人間の心の豊かさを育むものである ・真理探究を日常生活のベースに位置づけるため「より高い価値観」の創造をめざす。 ・人として豊かに生きる為には「生涯学習」が不可欠であり、それらは人である以上、「信頼関係(協働)の下での自己表現」の上に成り立っている」ということを音楽教育を通して理解していく。			
3. 教育の方法			
○明日の音楽教育を支える人材を養成する ・学生への信頼関係づくりからはじめ（どれだけ正しいことを言っても聞く耳をもってなければ意味をなさない）次につなげるためのレディネスを整える。 ・知識技能を活用できる「発表の場づくり」を常に念頭に置いて授業を展開する。 ・受動的な教育姿勢を廃止し、自ら考え積極的に参加し協働する授業形態の工夫。 ・信頼を得るために、まずこちらから全面的に信頼することを基本とする。			
4. 教育の成果			
○授業中は、自ら進んで学修する態度が多く見られ、8割方の学生において満足 of いく結果となった。 ・一番受講数の多かった「楽典」の授業について考察してみると、「この授業は総合的に満足できる」と答えた生徒が全体の8割であった。しかし授業中の確認テストにおいては全員が理解を示していたものの、実際の総括テストでは、全員が100点という結果は得られず、完全な能力の定着には至らなかった。これは、授業後の自主学習時間が不足しているというアンケート結果も出ており、改善をするための課題レポート等の工夫が更に必要である。			
5. 今後の目標			
○今後は、更なる「信頼しあえる人間関係の構築」を図り、他者と協働しながら各々の長所を伸ばしていける教育の環境づくりを目指していく。 ・短期的には毎回の授業で積極的な「一人一発表」を目指し、皆で協働しながら学修をサポートしていく。 ・長期的には生徒自らが独自の「音楽教育メソッド」を開発実演する能力を身に付けさせていく。			
・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）			
○参考資料 ・2023シラバス ・2022年度授業評価アンケート ・2022年度「音楽教育法」等の授業における各個人の課題（学習指導案づくり等）のまとめやレポート ・授業外で行った教育プログラム（演奏会等）			

ティーチングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部	氏名	林 悠子
1. 教育の責任			
人間教育学部幼稚園専修教員として、「子どもと表現（体育）」「子どもと表現の指導法」「教職実践演習（幼・小）」「人間教育実践力開発演習Ⅰ」「人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）」「人間教育学ゼミナールⅡ（応用）」（「教育実習（幼）Ⅰ・Ⅱ」「保育実習Ⅰ・Ⅱ」）を担当し、幼稚園教諭・保育士資格の取得を目指す学生らを指導している。また、小学校専修科目として「運動・健康の理解」、音楽専修科目として「音楽表現ⅠB（リズム&ダンス）」「音楽表現ⅡB（リズム&ダンス）」「身体表現演習Ⅰ」「身体表現演習Ⅱ」「身体表現特殊演習Ⅰ」「身体表現特殊演習Ⅱ」を担当している。自身の専門領域であるスポーツ科学・体育学をベースにして、広く身体と心の発達や、身体表現と音楽表現に関わった分野を担当している。			
2. 教育の理念・目的			
本学の教育理念に「現実に立脚した学術の研究と教育を通じて、明日の社会を開く学識と実務能力を兼ね備えた指導的人材の育成を目指し、時代の進展に対応し得る広い視野と創造性をつちかい、誠実にして協調性のある心身ともに豊かでたくましい実践力を持った人材を養成する」とあるが、特に学識と実務能力を備えた学生の育成を目指している。また、自身の専門であるスポーツ科学・体育学や心理学の立場からは、心身共に健全で豊かな人間性を持った学生を育てたいと考える。			
3. 教育の方法			
学識と実務能力を備えるためにはまず基礎的知識の定着が前提であると考えている。そのため、まずは教科書や参考資料をよく読み込み、特に重要なことを読み取り内容について要約する力を身につけられるようレジュメの工夫を行っている。また、体育や身体表現の実技では、幼児や小学生の体育として技能的に自身がすることが多いため、考えるよりも体を動かすことが先行しがちになってしまう。さらに、今の学生の特徴として動画など視覚に頼る部分が多いように思われる。その運動がどのような意味を持つのか、どのようなねらいがあるのか、何に気をつけるべきかなど、常に言語化させることに気をつけている。			
4. 教育の成果			
「運動・健康の理解」は後期において小学校専修2クラスと小学校免許取得者の1クラス計3クラスで講義を行っているが、満足度は3.85、4.0、4.17ポイント、わかりやすさや聞きやすさも4.0ポイントから4.57ポイントといずれも高い評価であった（2020年度後期授業評価アンケートより）。			
5. 今後の目標			
新キャンパスのスケールメリットを活かし、幼稚園での実習や授業展開での連携などをさらに進めていきたい。また、幼稚園から高等学校、大学まで揃うため、いずれは発育発達の縦断的研究を行いたいと考える。			
・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）			
「子どもと表現（体育）」「運動・健康の理解」「身体表現演習Ⅰ」シラバス参照			

学部・学科	人間教育学部 人間教育学科	氏名	原口 忠之
1. 教育の責任			
担当授業科目 幾何学基礎，幾何学A，幾何学B，応用数学I（位相幾何），教職表現力演習，開発演習IV，人間教育学ゼミナールI，人間教育学ゼミナールII 学生支援 ・課題・教採等に対応する動画の作成 ・質問対応 ・教採対策			
2. 教育の理念・目的			
自らの教育理念と目的 ・私の教育理念は、幅広い意味での成長である。数学を媒体として未来を担う子ども達の成長を促すことが目的である。 価値観・信念 ・近年は偏差値を上げることが教育の目的として注目を浴びることが多いが、偏差値に関係なく自分の好きなことを引き延ばせるような教育ができればと考えている。			
3. 教育の方法			
学生とは、対話を大事にし、授業中に学生の状況を確認しながら進行を意識している。とくに担当科目の幾何学では、幅広い幾何学的な性質を勉強することで、教員になったときの引き出しの和を多くしている。また、私自身も現在の研究・教育についてのニーズを理解するためFD／SD研修にも参加している。専門分野の位相幾何学では、連続写像のように柔軟性をもつ写像に対応しやすいホモトピー論を、柔軟性に欠ける微分構造をもつ対象に対して、導入することを試みている。			
4. 教育の成果			
私のゼミ生から、教採において、毎年、数学専修の1期生から1名以上が突破している。			
5. 今後の目標			
今後は、やり残している研究内容をまとめながら、新たな分野にも興味を持ち、微分空間の可能性を引き出したい。			
・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）			
採用試験の合格者情報については、問い合わせがあれば答えていきたい。			

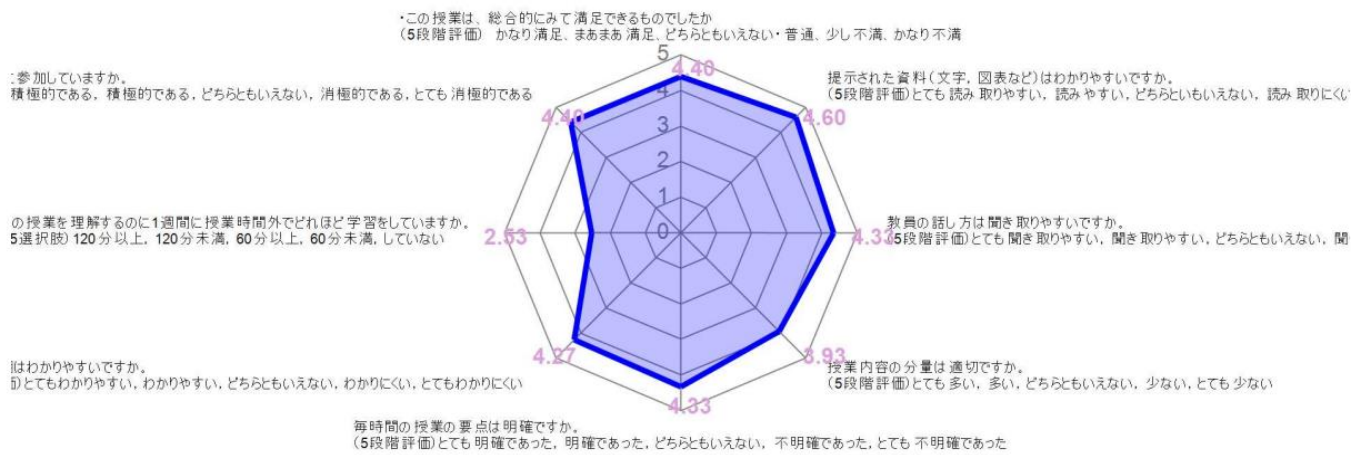
ティーチングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部	氏名	松岡克典
1. 教育の責任			
本学において、主に小学校教諭免許取得にかかわる科目を担当している。特に、公立小学校・国立小学校・私立小学校の教育現場の実務経験を生かし、授業のねらい、指導案作成の仕方や指導の在り方、子どもの様子、保護者の対応など、実践教育の基礎について具体的に指導している。 本年度は、人間教育学部の科目として、「算数科指導法」「数の理解」「人間教育ゼミナールⅠ」「人間教育ゼミナールⅡ」「教育方法・技術論A」を単独で開講しており、「教育方法・技術論B」「基礎ゼミナールⅡ」「人間教育実践力開発演習Ⅱ」「教職実践演習」「教育実習事前事後指導」「教育実習Ⅰ」「教育実習Ⅱ」はオムニバスまたは共同で開講している。 専門分野が算数教育であるため、実践に役立つような教材研究の仕方や教師の働きかけについて具体的に伝え、基本的な概念から捉え直すようにし、小学校教員となった場合に基本的な視点から捉える考え方を身に付けさせようとしている。 2023年度の担当科目 単独：算数科指導法、数の理解、人間教育ゼミナールⅠ、人間教育ゼミナールⅡ、教育方法・技術論A 共同：教育方法・技術論B、基礎ゼミナールⅠ、人間教育実践力開発演習Ⅰ、教職実践演習、教育実習事前事後指導、教育実習Ⅰ、教育実習Ⅱ			
2. 教育の理念・目的			
教育とは人間愛であるという立場で進める。それは、31年間小学校で実践教育を行ってきた経験から大切なことだと学生に伝えたいからである。教師は、担任になると決まった瞬間から、全く知らない子供たちであっても、全力をあげて尽くそうとする。この「人間愛に基づく教育・指導」を、実践でも生かすことができるよう、多くの具体的場面を取り上げ、より望ましい人間愛に基づく指導法について考察していくようにする。 私は、本学の教育活動において、以下の3点を重視している。 1) 小学校教育に関する専門的知識と実践力を身につけること 2) 子どもや家庭、保護者を取り巻く状況など、社会の出来事に関心をもつこと 3) 学びを通じた自己の成長を意識すること			
3. 教育の方法			
上述の教育理念を達成するため、例えば1年次後期の必修科目「数の理解」では、次のような授業を行っている。 この科目では、小学校算数科で扱う教育内容の背景や関連内容を中心に扱い、主体的・対話的で深い学びに繋がる授業づくりのための教材研究の手がかりが得られるように、具体的な活動を取り入れながら考察していく。 授業の際は、実際に小学校で使用している教科書や学習指導要領解説の該当ページを示し、書かれている内容の理解や行間をよむということを意識させるようにしている。また、算数科の授業DVD視聴を通して、実際の授業の様子や子どもの考えを具体的に学ぶことができるようにしている。そして、アクティブアカデミーのwebフォルダに授業の内容を掲載し、いつでも授業の振り返りができるようにしている。さらに、毎時間「課題レポート」を提出させ、本時の復習と次時の予習に取り組ませるように工夫している。 現在の教育現場の実態を把握するために、公開授業や研究授業に積極的に参加し、様々な小学校と交流を深めている。 自らの専門分野の成長のために、学会での発表や、論文投稿を行い、研究の成果や方向性を確かめている。			
4. 教育の成果			
2022年度前期「算数科指導法」の授業評価アンケートにおいては、全体結果の平均を少し上回る結果であった。授業が対面に戻り、模擬授業の指導や普段の授業でも学生の反応を確認しながら、場に応じた指導ができたという手応えがあった。また、授業時間外の学習の必要性を伝えること、具体的な指示、授業態度に対する指導などが、一昨年度と比較して向上した。 対面授業が実施され、学生の個々の学びの様子を把握できるようになったことが大きい。今後も全体と個のさらなる指導方法を身に付けたい。そして、意欲や興味を持続させる工夫をしていきたい。			
5. 今後の目標			
○短期的な目標 - 授業担当科目「算数科指導法」の充実 - 教育者としての表現力についての学生の理解を深め、学生の主体性をさらに引き出す授業を目指したい。 - 授業担当科目「数の理解」の学生理解度の向上 - 算数を学ぶ学生の理解を深め、授業力の基礎となる算数教育を促進したい。 - 学生指導の徹底 - 学修成果の向上につながる学生個々の指導を徹底したい。教員採用試験の合格率を上げる。			

- 中・長期的な目標
- ・大学教員としての資質・能力の向上
 - ・奈良学園小学校との連携推進
 - ・算数科授業デザインの開発をテーマとした研究推進

6. 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

- ・「教育方法・技術論A」「教育方法・技術論B」の授業を、ICT教育の内容を加えることと、テーマに関するディスカッションが活発になるようにシラバスを改善した。
- ・毎回の授業を振り返り、学生の実態に即した授業内容および方法を検討しながら、緊張感を持って教育改善に取り組んでいる。そして、学生を認める教育にこころがけながら教師養成教員としての自覚および責任感を持って教育に携わっている。また、学生の意欲・態度を引き出す授業となるように努力している。そのためには、学生と授業担当者との信頼関係が重要であると捉え、授業はもちろん授業外においても学生とのラポールを築くように取り組んでいる。
- ・毎年、全国算数・数学教育研究大会や日本科学教育学会で研究成果を発表している。2023年度は日本数学教育学会の春季大会と秋期大会でポスター発表口頭発表を行い。2024年1月には、第9回IAFOR国際教育会議(ハワイ)で口頭発表を行う予定である。
- ・科研費を継続取得し、研究推進の充実を図る。



ティーチングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部	氏名	森瀬智子
1. 教育の責任			
①合唱Ⅰ ②合唱Ⅱ ③西洋の音楽史と理解 ④諸民族の音楽 ⑤声楽実技Ⅰ ⑥声楽実技Ⅱ ⑦声楽演奏法演習Ⅲ ⑧声楽演奏法演習Ⅳ ⇒ 音楽専修科目、中等免許科目 ⑨音楽の理解 ⑩音楽科指導法 ⇒ 小学校免許科目 ⑪人間教育学ゼミナールⅠ（基礎） ⑫人間教育学ゼミナール（応用）⇒卒業必修科目 ・学生支援⇒ 昼休み補習講義（音楽の理解）、 2年生以上の音楽専修希望者への授業外個別レッスンと講義、希望者（小学校専修等）への授業外ピアノレッスン、 春休み、夏休みに音楽・小学校・乳幼児専修学生（希望者）教採2次試験に向けての弾き歌いとピアノ実技のレッスンの実施。			
2. 教育の理念・目的			
自分で考えて行動できる自律した音楽を通して社会に貢献できる人材の育成、幼児・児童・生徒があこがれるロールモデルになる教員の養成を理念としている。元来、音楽とは楽しく、また人の心を癒してくれるものでもある。教員が音楽に親しみ音楽の素晴らしさを身をもって伝えることで、子どもは音楽を楽しめるのだと感じ、自ら様々な音を試し、音楽に触れようとする。そのことによって自分を表現することもでき、認められることによって自己肯定感も高まる。そのような経験が生涯音楽に親しむ基盤となり、また音楽によってそれぞれの生活を豊かにすることにも繋がっていく。			
3. 教育の方法			
学生の自律のために、まず学生に「自分が今何をする時か考えて行動する」ということを中学生にこれまで問い続けたことで生徒が変容していったことを伝える。また、学生にもこれを問い続ける。 ・ロールモデルとなる教員養成のために、学びたいと学生が望めば、惜しみなく自分が得てきた音楽教育の技を伝え、音楽技能を高めたいと望めば、レッスンも幼・小・中専修問わずに行うことを伝えている。また、あこがれがあこがれを生むため、いかに子どもと音楽を一緒にすることが楽しいか、ということも伝えるようにしている。 ・学生同士であこがれがあこがれを生むように、学び合い、刺激し合う関係性を育めるよう、協同学習を柱とした授業を紹介、展開している。方法としては、研究を進めている深い学びに通じる一人ひとりが役割分担をもった協同学習の手法を主として授業を行っている。 ・協同学習に長年取り組んでいる神戸大学附属中等教育学校の音楽の研究授業の指導助言者であるため、昨年度の2月にはゼミの学生も研究授業に ・専 門分野においては、小学校・中学校・高等学校の音楽研究部会で合唱授業の講習や講演を行ったり、様々な中学校・高等学校の音楽の合唱指導を行い多くの生徒に接したりする中で、再度30年間蓄積してきたメソッドを見直し、歌唱発声における新しいアプローチ方法を実践し、効果を得ることができた。			
4. 教育の成果			
小学校免許科目『音楽の理解』では、学生の入学時での音楽の理解の差を感じていたため、昨年度までの内容に毎回数分でも鍵盤を弾ける時間を取り入れた。その結果、初回の授業では音符について理解できていなかった学生が、最後には科目の達成目標である両手で自作の簡易伴奏で『ふじ山』を弾き歌いできるまでになった。このことによって今まで音楽に触れていなかった学生も、本人にその気があり、丁寧に取り組むと、半年でもそこまで力をつけることができるということが明らかになった。また、授業での学生の音楽の理解度から、全てのグループができるだけ同じ力になるようにグループ分けをし、協同学習が効果的に進める工夫を行った。学生のリフレクションからは、4人で協同して課題を進めていくため、楽しんで課題解決ができ理解を深めることができた等の記述が見られた。 講義形式である『西洋の音楽史と理論』では映像を視聴して考える等は自分ごととして集中して学習できたようである。しかし、協同学習の手法を使った授業の展開方法を伝えることはできたが、協同学習は個人が役割分担をもち、話し合い、課題を解決する方法であるため、授業の進捗と計画の関係から、協同で学習を進めることはできなかった。			
5. 今後の目標			
音楽科の協同学習の手法を学生にもっと学びたい、と意欲を持たせる為に、学生が興味をもった小学校音楽で使う常時活動の言葉と同じくらいの頻度で学生に協同学習について話をし、紹介していく必要がある。効果が見えてくると、学生も自律して授業時間外にも学修に取り組むことが増える。 ・短期的には学生のレベルに合わせたポップスを用いた協同学習の単元を用いて興味をひく授業を実際学生に体験させ、音楽は身近で楽しいものだと感じさせることで学習の自律を目指す。 ・長期的には特に音楽専修の学生においては、2年次の『諸民族の音楽』や『西洋の音楽史と理論』において、協同学習の手法を使った授業の指導案を作成し現場で実践を行う。またゼミでは協同学習の手法で学習を進めた後、その手法を用いた中学校の授業見学の場を設定する。その第一段階として、2月には私が指導助言を務める協同学習の手法を使った音楽科授業の研究会へゼミの学生とともに訪れた。次はゼミの学生が作成した協同学習の手法を用いた鑑賞領域の指導案を中学校や高等学校の音楽の授業で実践し、検討⇒改善を行うことを繰り返し、新規性のある鑑賞授業を学生と共に創造する。 ・新規に2月実施の音楽専修学生発案の演奏会が継続して毎年学生のマネジメントで行われ、内容もより良いものに進化していき、集客力のある演奏会に成長していくことを目指したい。			
・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）			
・シラバス、授業評価アンケート（本学HP）			

ティーチングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部・人間教育学科	氏名	山田 明広
1. 教育の責任			
○担当授業科目（2023年度） ・漢文学入門 ・漢文学Ⅰ ・漢文学Ⅱ ・語学・文学総合演習Ⅲ（漢文学） ・漢文学特論 ・人間教育学ゼミナールⅠ（基礎） ・人間教育学ゼミナールⅡ（応用） ・教育実習Ⅰ（中・高） ・教育実習Ⅱ（中） ・教職表現力演習 ・国語表現力演習 ・日本語Ⅰ ・日本語表現Ⅱ ○各種学生支援 ・3、4年次のゼミ生を中心に就職対策（教員採用試験の一般教養・専門科目のうちの古典の対策、公務員試験対策、一般企業のSPI・玉手箱の対策、各種就職試験の作文・小論文の添削等）を実施している。 ・社会・国際連携センターの運営委員として、本学の提携校である屏東科技大学および蘇州科技大学との交流会の企画、実施および学生指導を担当している。 ・学生から相談を受けた場合、適宜、面談等を実施している。 ・茶道部顧問			
2. 教育の理念・目的			
○教育の理念・信念： 何事にも基礎が重要。基礎の集積が理解へとつながり、そして自発的学習や発展的学習へとつながり、最後には研究へとつながっていく。 ○教育の目的： 専門知識や読解力をでるだけ身に付けさせることを通して、学ぶことによって新たな知識を得たり何かをできるようになったりすることの楽しさや喜びを伝え、それにより自ら学び・考え・研究する態度や能力を涵養する。			
3. 教育の方法			
○授業の方法・内容： A, 漢文学関連科目〔漢文学入門、漢文学Ⅰ、漢文学Ⅱ、語学・文学総合演習Ⅲ（漢文学）、漢文学特論〕について ①まず、漢文の基礎である漢文法・句形を講義形式で丁寧に解説し、演習問題に取り組ませる。解説の際には、ただただ漢文の句形のみを扱うだけでなく、古典文法や現代中国語文法、漢字の特殊な読みおよび意味などにも言及し、できる限り覚えやすくなるように工夫する。また、漢文訓読独特の言い回しを身に着けさせるため、漢文の短文を暗唱させる。毎時間、課題として演習問題を課すとともに、さらに各単元が終わるごとに小テストを実施する。このようにして、漢文の基礎である漢文法・句形を習得させる。 ②次に、故事成語のもととなった文章から、戦国諸子百家の文章、漢詩、歴史、散文、小説などに至るまでの各ジャンルの漢文による文章を順に選んで読んでいく。同時に、関連する思想や文学、歴史的事象についても講義し、知識を身に着けさせる。学生には課題として事前にノートに書き下し文と現代語訳を書かせるとともに、分からない語句の意味を調べさせておく。このようにして、漢文の読解力を養うとともに、漢文読解に必要な知識を身に着けさせる。 ③漢文の読解力がある程度身に着くと、漢文の構造について講義した上で、返り点のみの文章や白文の読解に取り組む。これら1～3を通して、漢文を独力で読解できる能力を養い、ひいては漢文読解を伴う研究を行う能力を身につけさせる。 B, ゼミナール〔人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）、人間教育学ゼミナールⅡ（応用）〕について 「国際理解に向けての日中比較文化研究」というテーマの下、 ①「人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）」（3年次生対象）においては、基本的な知識を得るべく、中華圏の文化および中華圏の文化と日本の文化との関連についての講義を行い、学んだことをまとめ、討論させている。また、適宜、フィールドワークを取り入れ、学んだことが机上だけのものにならないよう、できる限り実際に体験させている。 ②「人間教育学ゼミナールⅡ（応用）」（4年次生対象）においては、学生個人が個別に設定したテーマについて調べさせ発表させている。また、特に希望する者には、卒業論文を書かせ、その指導も行っている。さらに、就職試験や面接に関する指導も行っている。 ○学生との接し方： ・学生が授業により積極的に取り組むことができ、さらに気軽に質問に来られるよう、授業においては、厳しく接するべき時には厳しく接するものの、基本的には穏やかな態度で学生に接し、時には雑談などを取り入れるなどして、教員と学生が相互にコミュニケーションを取りやすい雰囲気を作るよう心掛けている。			

4. 教育の成果

○達成できたこと、できなかったこと：

・ これまでに数名の学生が、中学校ないし高校での教育実習の研究授業において漢文を主とする授業を行うなど漢文の授業を行うことのできる学生は育成することができた。しかし、自ら進んで漢文の作品を読んだり漢文の白文を独力で読解しようとしたりするような漢文に興味・関心を持ち進んで学ぼうとする学生はいまだ育成できていない。

5. 今後の目標

○短期的目標

- ・ 漢文に関心を持ち、中学校ないし高校での教育実習においてある程度自信を持って漢文の授業を行える学生を輩出する。
- ・ 海外のことに興味を持ち、海外留学や海外との交流に関する活動に進んで参加する学生を輩出する。

○長期的目標

・ できるだけ多くの学生に漢文の白文を独力で読解できるなど漢文に関する発展的な能力を身に付けさせ、ゆくゆくは高等学校国語科教員採用試験合格者、ひいては漢文を用いた研究を行う研究者となるべく関連の大学院へと進学する者を輩出させる。

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

- ・ 学生評価アンケート
- ・ シラバス

学部・学科	人間教育学部・人間教育学科	氏名	石原 由貴子
1. 教育の責任			
〈担当授業科目〉 ・ 幼児理解 ・ 保育内容総論 ・ 子どもと表現（図工） ・ 子どもと表現（音楽） ・ 子どもと表現の指導法 ・ 基礎ゼミナールⅡ ・ 教育実習事前事後指導 ・ 教育実習 ・ 教職実践演習 ・ 人間教育学ゼミナールⅠ（基礎） 〈各種学生支援〉 ・ 2022年度は、幼稚園専修1年次生の担任として、学修指導や生活指導など必要に応じて対応している。また、4年次生の面接指導や実技指導を行っている。			
2. 教育の理念・目的			
「教育は愛」という理念の下、下記の3点について重視していきたい。 ○教師・保育士としての社会性や対人関係能力の育成 ○これからの時代の教育を担う実務・実践力の養成 ○豊かな想像力・創造力・表現力の育成			
3. 教育の方法			
〈学生との接し方〉 ・ 学生との対話を重視し、一人一人に応じた具体的な支援を心掛ける。 〈授業の工夫〉 ・ 具体的な実践例や写真、動画等をあげながら、保育現場や子どもの様子がイメージできるようにする。 ・ 授業中、その都度課題に取り組ませ、理解の促進を図るようにしている。 〈FD/SD活動等にかかわる内外の研修会への参加〉 ・ 学内におけるFD/SD研修会に参加し、学びを深めている。 ・ 園内研究会の講師として参加し、保育現場の様子を把握している。 〈自らの専門分野の成長〉 ・ 日本保育学会、日本学校教育相談学会、子どもと保育実践研究会等に参加し最新の知見を得るようにする。			
4. 教育の成果			
〈達成できたこと、できなかったこと〉 ・ 「実際の現場でのことを聞かせてもらえるからよくわかる」「授業が楽しい」等の意見を聞くことができた。今後も意欲的に学修に取り組めるようにしていきたい。 ・ 予習や復習に割く時間が少ないように見受けられるので、自ら問題意識をもち、積極的に学修に取り組めるような授業内容を構築していきたい。 〈授業アンケートの結果〉 ・ 各項目について、おおむね学内の平均値を上回っている。			
5. 今後の目標			
〈短期的目標〉 ・ 学生の興味や関心を引き出し、自ら意欲的に学修に取り組めるような授業を目指したい。 〈長期的目標〉 ・ 柔軟でしなやかな心をもった教員、保育士となれるような取り組みを考えていきたい。			
・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）			
〈いくつかの科目についてのシラバス〉 ・ 本学Webサイトに公開されているシラバスを参照のこと。 〈研修会や学会への参加状況〉 ・ 子どもと保育実践研究会では、2か月に1回程度、保育現場の先生方や幼児教育に携わる方々との研修を深めている。 ・ 各学会や研修会に参加している。			

学部・学科	人間教育学部	氏名	太田雄久
1. 教育の責任			
<担当科目> 理科指導法、自然の理解、人間教育実践力開発演習Ⅰ、教職実践演習（幼・小）、教育実習事前事後指導（小）、教育実習Ⅰ（小）、教育実習Ⅱ（小）、基礎ゼミナールⅠ、人間教育学ゼミナールⅡ（応用）、卒業研究			
2. 教育の理念・目的			
卒業後1年目から即戦力として現場で指導ができる教員になるための資質・能力の育成と人間性の向上			
3. 教育の方法			
・課題の提出期限の遵守、教務システムの使用方法、メール等での連絡の確認漏れがないようにすることなど、大学生活を送るにあたって必要な事項を徹底して指導する。 ・理科指導法、自然の理解ではテキストとして使用している『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説理科編』を根拠にしながら小学校理科の授業論や内容論について指導する。			
4. 教育の成果			
・先述したテキストの内容を根拠にしながら課題やレポートに取り組んだり、期限を守ってそれらを提出したりする学生が増えてきている。			
5. 今後の目標			
・小学校理科を核としながら教科横断的な視点で小学校での授業づくりを実践できる学生の育成			
・必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）			

学部・学科	人間教育学部人間教育学科	氏名	荻布優子
1. 教育の責任			
私の教育の責任は、小学校教諭および特別支援学校教諭の養成である。私は横浜市リハビリテーション事業団において障害児の発達アセスメントや保護者支援を担う心理士の職を経て、特別支援教育免許状取得に関する心理学領域の担当教員として2019年度秋に着任した。本学では2020年度より特別支援学校教諭免許状の取得が可能となり、関係する科目の開講が2021年度から開講された。これまでに担当した科目とその内容は以下のとおりである。 ①教職実践演習（2019-2020年度,2022年度）：通常学級における特別支援教育の考え方・ストレスマネジメントなど ②基礎ゼミナールⅠ（2020,2022年度）：アカデミックスキル（特にプレゼンテーションや研究方法の基礎）の習得 ③教職表現力演習Ⅰ（2020-2021年度）：アカデミックスキル（特にレポート作成や小論文作成）の習得 ④教育実習事前事後指導（2020年度）：教育実習に臨むにあたっての知識とスキルの習得、今後の教育実践に活用できる知識とスキルの習得 ⑤人間教育学ゼミナールⅠ・Ⅱ（2020年度～）：子どもの発達・発達障害や知的障害の認知特性・発達障害児の指導法など ⑥知的障害者の心理（2021年度～）：知的障害者や関連する障害の心理特性・行動特性・支援方法について ⑦知的障害者の生理・病理（2021年度～，オムニバス）：知的障害や発達障害の疫学や診断・病理的要因について ⑧肢体不自由者の心理・生理・病理（2021年度～，オムニバス）：肢体不自由を引き起こす疾患、心理特性・行動特性・支援方法について ⑨発達障害者の心理（2021年度～）：発達障害の心理特性・行動特性・支援方法について ⑩障害の検査と評価（2022年度～）：根拠に基づいた教育を行うための心理アセスメントについて ⑪特別支援A・B（2021年度～，オムニバス）：知的障害・発達障害・肢体不自由等の心理特性・行動特性と教育上の配慮について			
2. 教育の理念・目的			
私は特別支援学校教員としての専門性を有した教員を養成すること、インクルーシブ教育やインクルーシブな社会を実現しようとする社会人を育てること、を目標としている。また私は公認心理師であることから、心理学的な観点から教育や学生支援を実践している。青年期における重要な発達課題はアイデンティティの確立であることを前提とし①科学的なものの見方を身に付け根拠に基づいて自身の意見をもつ②柔軟に様々な価値観を受け入れられるしなやかな心をもつ③自律的な学習態度をみにつける、の3点を重要視している。			
3. 教育の方法			
上記の教育の理念・目標を達成するために行っている具体例をいくつか挙げる。 「発達障害者の心理」「障害の検査と評価」では、心理検査を用いたり実際に児童の行動を記録にとり児童理解を深め指導目標を立案するという実践的な学習にぐわえ必ず「何のために」「誰のために」その指導・教育が必要なのかを言語化することをしている。そうすることで特定の児童生徒に対する支援なのか、特定の児童生徒に対する支援ではあるが他の苦手を有する児童生徒にも何らかの利益がもたらされるのか、児童生徒の多様性に対応するための基礎的な環境整備であるのか、といった観点を常に意識することに繋がると考えている。 学生対応では、様々な苦手意識や自信の無さを感じている学生が多いことから、まず学生の訴えを傾聴し、ポジティブな側面を言語化してフィードバックすることを意識している。そのうえで様々なものの見方や考え方の具体例をいくつか提示した上で、現場面で最良と思われる考え方や具体的な行動を学生と共に考え、学生自身が納得して選択するという形で学生からの相談を終えられるようにしている。 また障害児者の支援に関する専門性をより高めるため各種学会（特殊教育学会や日本LD学会）への参加や、公認心理師を対象とする研修会への参加を定期的に行っている。			
4. 教育の成果			
授業評価アンケートではいずれの項目でも4以上の評価を得ている。また講義中や学生対応の際の学生からの反応をみると、実践的な演習を行うことができ専門的な学びとなっている、指摘だけでなく具体的な提案があるためより課題への取り組み方がわかりやすい、自分の考えを整理するまで時間をかけて対応があるため納得ができる、などの感想を得ている。			
5. 今後の目標			
2023年度には本学部学生が初めて特別支援学校で教育実習を行う。実習生や実習校からのフィードバックを踏まえて、自身の専門性を生かし、特に関連する心理学領域について児童生徒の実態と関連付けながら学生に障害に関する知識を教授し、正しい知識（＝根拠）を得ることにより偏見や差別をすることなく様々な多様性を当たり前に受け入れられるしなやかな心を持ち合わせた教員養成を実践していきたい。			
・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）			
大学HP、WEB シラバス参照			

学部・学科	人間教育学部	氏名	オチャンテ カルロス
1. 教育の責任			
本学担当科目 ①外国語の指導（英語、スペイン語） 英語関連科目では4技能を活かした外国語指導を行っている。スペイン語の授業ではロマンス語の世界（言語と文化）を紹介し、日本語との外国語比較を常に行っている。 ・英会話I (26人) ・英会話II (25人) ・スペイン語会話 (18人) ・スペイン語基礎I (33人) ②小学校で外国語（英語）を指導行うための授業 ・小学校低学年では話す・聞くの指導、高学年では、読む・書くの外国語指導を行っている。 ・外国語の理解 (77人) ・外国語科の指導法・小学校外国語活動の指導法 (53人) ③現代教育課題における異文化教育 多様化する日本の公立学校において、異文化教育、多文化教育の理解を深め、外国に繋がる子どもの背景と対応を学ぶ。 ・現代教育課題D（学校における異文化理解）(26人) ④人間教育学ゼミナールI（20） 新入生対象科目として、アカデミックスキル、教育学の基礎知識を身につけることを目指している。 ⑤人間教育実践力開発演習I（20） 新入生を対象に学校生活や教育分野におけるコミュニケーションスキル、ソーシャルスキルを身につくことを指導している。 ⑥研究及びキャリア（進路）指導 ・人間教育学ゼミナールII (7人) ⑦英会話におけるSA（スチューデント・アシスタント）の活動 ・教員を目指す学生をSAとして設け、英語指導力を身につけさせる指導を行っています。 SA活動を通して英語指導に自信が身につけ、後輩へのロールモデルとしての役割を果たしている。 ⑦採用試験、英語対策、ICT指導 ・4回生対象に教員採用試験の英語対策講座をエクステンションの形式で行っている。 ・4回生対象に採用試験で求められるICT力の指導を行っている。 ・毎週火曜のランチタイムに参加自由型の英会話教室を行なっている。			
2. 教育の理念・目的			
人間教育学部として「人間」または「良い教育者」目指すため、新しい時代において視野の広い学生の育成を授業で目指しています。 今後グローバル社会の中で多言語や他民族における国際理解、多文化共生への理解（価値観）を深めることを常に意識しながら生活できる学生の育成を目指し、近代社会におけるICT教育の円滑な適応能力の育成を目指している。			
3. 教育の方法			
①指導者が外国籍のため、これまでの経験を活かして、国際理解、多文化、多言語における多面的な視点で指導を行っている。 外国語として英語指導の関連科目では英語、スペイン語や日本語との比較を常にし、学生の外国語における視野を広げることにより力を入れています。 具体的にそれぞれの言語の特徴（文法や文化など）を用いて外国語の共通点や違いを理解させることによって言語理解だけでなく、母語である日本語に対しての考え方、理解を見つめ直すことになっている。これらをもって異質への理解を迎えることで異文化への理解の促進も得られている。 ②全ての授業におけるICT教育の取り組み（情報リテラシー） これまでICT教育を活かして、学生の授業内外で学習などのマネジメントを行ってきました。 授業は全てGoogle ClassroomまたはMicrosoft Teamsで授業資料、課題管理、学生の意見共有などを行っている。現在、世界でこのようなプラットフォームを活かすことが近代の風習であり、学生の情報リテラシーの促進が求められる社会としての価値だけでなく、学生のニーズ、学習ペースにも大きく貢献していると言われている。授業ではノート作りやメモの取り方を強く推奨しながらもグループワークやクイズではスマートフォンを有効な使い方に力を入れた授業を行っている。			

- ③アクティブラーニングを活かした学習環境作り
- 授業ではグループ・ディスカッション、ディベートまたグループ・ワークを活かして、学生の能動的な学習を目指した授業作りを行っている。これらの取り組みでは学生同士の仲間作り以外に、プレゼンテーション力や意見の出しやすさの環境作りを目指している。
- ④多様化する教育課題への取り組み
- 現代多様化している日本の公立学校の実態を学ぶ取り組みとして、大学生中心による教育支援を三重県伊賀市の子どもを対象に行なっている。本活動の学生は指導側となり、外国に繋がることもへの教育支援を通して、言語の課題等、子どもが抱える背景の理解を深めることを目標としている。

4. 教育の成果

- ① 英語 4 技能における実践
- 履修学生が多い科目では実践できる時間が限られる。そのためリスニングやスピーキングにおいての実践課題としてオンラインでリスニング課題（動画＋プリント）を設け、また、スピーキングとして自己録画の提出を求めています。学生はこれらの課題を提出させ（グーグルクラスルーム）教師がチェックと評価をスムーズに行うことが可能。学生はペアーや一人で作成した動画では練習を重ねて行ったりすることで実践的な英語学習が毎回行うことができた。
- ②言語の理解を深めることで外国語への好奇心を促すような授業の作り方（外国語指導法）を模擬授業で実践された。
- 模擬授業では音声指導を扱い、日本語と英語の音素の違いから英語指導ではフォニックスを取り扱う実践的な指導を行った。英語教材における国際理解・異文化理解の要素を理解するために異文化教育の基本を導入し、グローバル社会における多言語の実態を理解できた。英語力がない学生は英語関連の科目だけでなくスペイン語の科目でも付いていけない課題があるため今後は学習プリントや復習課題をより充実したいと感じる。
- ③ICTによる資料の最適化、課題の提出率の向上
- 授業で取り扱った資料には動画や音声を取り扱った。外国語指導するためには音声や顔（口）の様子を確認することが不可欠なため、Youtubeでオンデマンド授業を行っている。オンラインでの資料は学生の学習ベースに合わすことが可能にすることで様々なニーズに対応が可能になりました。
- 課題においてオンラインで提出が可能にした（グーグル・クラスルーム）。授業で取り扱うノートやプリントをオンラインで提出させることで管理をし易くなるだけでなく、学生が提出しやすい形式になったことでスマートフォンあればいつでも課題を提出ができ評価やコメントなども加えることで学生のと授業の外でのコミュニケーションは可能になる。課題の管理は教師だけでなく学生自身も確認が取れるので実際に課題の提出率が向上した。全ての学生のパソコンとインターネット環境は整っていない課題であるため、今回の授業で支障はなかったが、パソコンを使いこなしている学生とそうではない学生の情報リテラシーは今後指導をもっと徹底的に行いたいと感じる。

5. 今後の目標

- 外国語の実践できる場
- ・ 今後の授業では他大学とのコラボレーションで英語の実施的な場を設けたい。
 - ・ 英語学習の場としてエクステンションまたはサークルで英語学習のできる場を設けたい。
- ICT指導の推進
- ・ 今後、教育現場で求められるデジタルリテラシーの育成に繋がるように授業で様々な展開を工夫し、アクティブラーニングとICTを混合した授業作りを目指したい。

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

講義科目名称： 英会話Ⅰ

授業コード： 21103 22103 51103 52102

英文科目名称：

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
前期	1	1	必修
担当教員			
オチャンテ カルロス			
火・1 火・2 金・1 金・2			
添付ファイル			
人間教育学部 人間教育学科 カリキュラムマップ.pdf			

授業の目標・概要	日常生活をはじめとして、学校生活や友人との会話など様々な場面で英語を利用できるよう多様な場面を想定し、会話に必要な文法・語彙にもできるかぎり焦点を当てられるように工夫しながら、自分の意思を正しく相手に伝える力の習得を目指す。また、英米などの文化や習慣にも興味を持てるよう配慮し、相手を理解しようとする態度を養成する。受講生が自信を持って英語を使用し、様々な人とコミュニケーションをとっていくための英会話の基礎編となる授業である。
学習の到達目標	基本的な文法を軸に「読み、書き、聞く、話すの4技能」のすべての面で、コミュニケーション能力を高める。
授業方法・形式	1. それぞれの学習テーマに対して、テキストや補助資料を活用しながら授業を進めていく。 2. 必要に応じて、取り上げるテーマに関するディスカッションを行う。
授業計画	第1回 Greetings/Introductions (挨拶と自己紹介) 挨拶表現、be動詞・一般動詞の使い方 第2回 Introduction (他己紹介) 現在形を使い、現在の行動・習慣を述べる 第3回 What did you do? (過去の出来事) 過去形を使った表現 第4回 What are you doing? (現在の行動) 進行形・未来を使った表現 第5回 What is it? (物の説明) 助動詞(推量・可能性)を使った表現 第6回 Giving advice (助言する) 助動詞(義務・責任・助言)を使った表現 第7回 Making questions 1 (許可・依頼) 助動詞(質疑応答：許可・依頼・提案の表現) 第8回 Making questions 2 (提案) 助動詞(質疑応答：提案の表現) 第9回 Show and tell (自分の物や経験について) 可算・不可算名詞、冠詞、形容詞を使った表現 第10回 Shopping (買い物) 可算・不可算名詞、代名詞、数量(金額) 第11回 Where is ~? (故郷や学校について) 場所の説明：前置詞、地図を使って 第12回 Where is ~? (街中や建物の中) 場所の説明：前置詞、行き方を伝える 第13回 What's the matter? (健康・病気について) 助動詞と形容詞 第14回 How do you do that? (やり方・方法について) 動詞と副詞 第15回 Review (復習)
成績評価の基準	授業内の受講態度・小テスト・スピーキングテスト等(50%)、総合的な理解を確認する学期末テスト(50%)に基づいて判断する。
準備学習・復習及び授業時間外の課題	1. 各講義における課題をシラバスを通して理解し、中高の教科書や副読本などを活用して復習しておく。 2. 各講義後に学んだ英文法・文章について、声に出しながら復習し、わからない部分は文法書等で調べておく。 3. 各講義後の復習に時間をかける。
履修上のアドバイス及び留意点	単語と英文法が基礎となっており、英会話が成り立ちます。英語基礎力を上げるよう、日々英語に楽しく触れていってください。
教材・教科書	テキスト：授業中に指示する
参考書	『Getting into English』Joseph Cronin (著)、Eric Bray (著) NAN' UN-DO
実務経験のある教員による授業	

講義科目名称： 外国語の理解

授業コード： 31103 33103

英文科目名称：

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
前期	4	2	選択
担当教員			
オチャンテ カルロス			
水・1 水・3			
添付ファイル			
人間教育学部 人間教育学科 カリキュラムマップ.pdf			

授業の目標・概要	まず、英語運用力としてクラスルームイングリッシュやフォニックスなどを扱い、「聞くこと・話すこと〈やり取り・発表〉・読むこと・書くこと」に関する知識を身に付ける。次に、英語の背景知識については、理論を学び、それをアウトプットできるように配慮した主体的・対話的な授業となる。		
学習の到達目標	小学校における外国語活動・外国語の授業実践に必要な英語運用力と英語の背景知識を身に付ける。英語運用力に関しては授業場面を意識すること、英語の背景知識については音声などの基本的知識から第二言語習得、児童文学、異文化理解を学ぶことを目標とする。		
授業方法・形式			
授業計画	第1回 外国語の理解とは何か。 自分の英語力を知る（聞くこと・話すこと〈やり取り・発表〉・読むこと・書くこと） 第2回 音声に関する基本的な知識（母音・子音の出し方） 歌・チャンツの指導（聞くこと・話すこと）1 第3回 音声に関する基本的な知識（英語の発音ルールについて） 歌・チャンツの指導（聞くこと・話すこと）2 第4回 フォニックスに関する基本的な知識（基礎） クラスルームイングリッシュについて（聞くこと・話すこと）1 第5回 フォニックスに関する基本的な知識（発展） クラスルームイングリッシュについて（聞くこと・話すこと）2 第6回 文構造・文法に関する基本的な知識（日本語との違い） 外国語活動・外国語を想定した活動を体験しながらの英語のやり取り（発表1） （聞くこと・話すこと） 第7回 文構造・文法に関する基本的な知識（時制などの外国語で取り扱う文法事項） 外国語活動・外国語を想定した活動を体験しながらの英語のやり取り（発表2） （聞くこと・話すこと） 第8回 語彙に関する基本的な知識 外国語活動・外国語を想定した活動を体験しながらの英語のやり取り（発表3） 第9回 第二言語習得に関する基本的な知識（インプット仮説・アウトプット仮説） 絵本の読み聞かせ（聞くこと・話すこと・読むこと）1 第10回 第二言語習得に関する基本的な知識（発達理論） 絵本の読み聞かせ（聞くこと・話すこと・読むこと）2 第11回 児童文学に関する基本的な知識 絵本の読み聞かせ（聞くこと・話すこと・読むこと）3 第12回 異文化理解に関する基本的な知識 自己紹介・地域紹介・学校紹介等の発表（話すこと） 第13回 異文化コミュニケーションに関する基本的な知識 目的に応じたALTとの会話について（話すこと） 第14回 正書法に関する基本的な知識 板書における英語の正しい表記（書くこと） 第15回 外国語の理解に関するまとめ 「聞くこと・話すこと〈やり取り・発表〉・読むこと・書くこと」とは何か。		
成績評価の基準	小レポート・小テスト(40%)、授業内発表(20%)、定期試験(40%)を総合的に判断する。		
準備学習・復習及び授業時間外の課題			
履修上のアドバイス及び留意点			
教材・教科書	随時プリント配布		
参考書	授業内で紹介		
実務経験のある教員による授業			

講義科目名称： 小学校外国語活動の指導法

授業コード： 22157 23159

英文科目名称：

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
後期	2	2	選択
担当教員			
オチャンテ カルロス			
火・2 火・3			
添付ファイル			
人間教育学部 人間教育学科 カリキュラムマップ.pdf			

授業の目標・概要	実践研究の授業の視聴や第二言語習得の理論、指導技術についての解説を聞き、「主体的・対話的で深い学び」を目指した外国語の授業について学習する。次に、学習指導案を作成しそれに基づいた模擬授業を行うことにより英語授業の実践力を身に付ける。さらに、授業後は、振り返りとして、質疑応答と指導助言の時間を設け工夫されていた点や改善点などについて全体で討議する。	
学習の到達目標	小学校における外国語活動（中学年）・外国語（高学年）の授業実践に必要な知識の理解を深め、評価を含めた基本的な指導技術・指導案作成力・英語授業力を身に付ける。さらに、多種多様な児童の状況に合わせた外国語指導について考え、中学校への学びの基礎を作ることを意識する。	
授業方法・形式		
授業計画	第1回	外国語科教育の目標と内容 学習指導要領の総則及び外国語活動・外国語の目標、内容などを基に学習指導要領のポイントについて
	第2回	小学校の役割と児童への対応 小・中・高等学校の連携と小学校の役割、児童や学校の多様性への対応について
	第3回	児童期の第二言語習得の特徴1 言語使用を通じた言語習得、児童の発達段階を踏まえた質のいいインプット等について
	第4回	児童期の第二言語習得の特徴2 コミュニケーションの目的、音声から文字へと進むプロセス、国語教育との連携等について
	第5回	児童期の第二言語習得の特徴を生かした授業のDVD視聴とディスカッション
	第6回	英語での語りかけ DVD視聴と実践練習
	第7回	児童の発話の引き出し方、児童とのやり取りの進め方 DVD視聴と実践練習
	第8回	文字言語との出会わせ方、読む活動・書く活動への導き方 絵本を用いた実践練習と板書の仕方
	第9回	学習指導要領に基づいた学習指導計画と評価 学習指導計画の作成上の留意事項や単元指導計画、学習指導案の作成について
	第10回	主教材と補助教材の選定 題材の選定、教材研究、ICT等の活用について
	第11回	チームティーチング ALTとのチームティーチングによる指導の在り方
	第12回	模擬授業（中学年）
	第13回	模擬授業（高学年）
	第14回	模擬授業（振り返り）
	第15回	主体的・対話的で深い学びに向けた外国語指導科についてのまとめ 外国語教育の実践的な指導をめざす観点からの振り返り
成績評価の基準	小レポートと小テスト(30%)、指導案作成・模擬授業(30%)、定期試験（40%）を総合的に評価する。	
準備学習・復習及び授業時間外の課題		
履修上のアドバイス及び留意点		
教材・教科書	文部科学省「小学校学習指導要領」、「小学校学習指導要領解説」「外国語活動編」「外国語編」（平成29年告示）	
参考書	授業内で随時紹介	
実務経験のある教員による授業		

ティーチングポートフォリオ

学部・学科	人間教育学部・人間教育学科	氏名	葛城 元
1. 教育の責任			
2022年4月から奈良学園大学に在籍し、数学の基礎科目、確率・統計分野の専門科目、および教職に関わる科目を担当している。 【担当科目】 奈良学園大学人間教育学部 数学入門（2単位 1年配当 選択）、数学の世界（2単位 1年配当 選択）、確率・統計基礎（2単位 2年配当 必修）、確率・統計応用（2単位 3年配当 必修）、基礎ゼミナールⅠ（4単位 1年配当 必修）、人間教育実践力開発演習Ⅰ（4単位 1年配当 必修）、人間教育学ゼミナールⅠ(基礎)（4単位 3年配当 必修） 京都教育大学教育学部（非常勤） 初等算数科教育（2単位 2年配当 必修） 【各種学生支援】 数学道場（1年配当） 【担当委員】 NGU-NET運営委員			
2. 教育の理念・目的			
数学教育では算数・数学の問題を効率的にわかりやすく子ども達に指導するのは大切なことであるが、算数・数学を教える職業につくものとしては十分でない。数学が持つ奥深さや魅力を子ども達に伝えられるようになるためには、数学の成り立ちや仕組みを正しく理解し具体的に説明できるようになることが必須であると考え。これまで学んできた数学を、どうして？なぜ？と問い直し追求していく大学での学びが、実際の指導の現場でも役立つと考える。			
3. 教育の方法			
【学生との接し方】 ・可能な限りではあるが授業中、オフィスアワーを通じて質問対応している。学生には単に答えを与えるのではなく自身で解決策を見つけられるような助言を中心に行っている。 【授業の工夫】 ・数学の専門科目「確率・統計基礎」では、学生が事前に教員自作の動画を用いて基礎・基本を学習し、授業内では講義・演習を通じて事前に学んだ内容をさらに深める反転授業を取り入れている。特に、確率・統計分野では学ぶべき概念や手法が多岐にわたるため、解法の暗記・習熟に傾倒しがちであるが、あえて指導内容を精選し本質的に理解しようとする態度の涵養を重視している。 【自らの専門分野の成長】 ・数学教育学会、日本教育実践学会、日本STEM教育学会、日本教育工学会の学会に参加し細心の知見を得る。			
4. 教育の成果			
【達成できたこと】 ・授業アンケートの結果から、科目「確率・統計基礎」の予習・復習の時間が増加したこと。 ・学生が数学の定理や解法を暗記するだけでなく、その成り立ちや仕組みにも言及できるようになってきたこと。 【達成できなかったこと】 ・予習に取り組んではいるが、基礎的な内容を理解できていない学生に対してフォローすること。			
5. 今後の目標			
【今後どうしていきたいか】 ・数学の専門科目「確率・統計応用」にも反転授業を導入すること。 ・数学の基礎科目および教職科目にはパワーポイントなどの視覚教材を利用するなどして、さらに学生の理解を深めるように工夫すること。			
・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）			
【いくつかの科目についてのシラバス】 ・本学Webサイトに公開されているシラバスを参照のこと。 【研修会や学会への参加状況】 ・「これからの算数・数学教育を考える会」を3か月に1回でオンライン開催し、学校現場の先生方と交流を図っている。 ・例年、各学会に参加している。 【いくつかの科目についての授業アンケート等】 ・本学Webサイトに公開されている授業アンケートを参照のこと。			

学部・学科	人間教育学部	氏名	前田 綾子
1. 教育の責任			
○担当授業科目（2023年度） ・子どもと言葉・子どもと言葉の指導法・保育者論・保育表現力演習・保育実習指導Ⅰ・保育実習指導Ⅱ ・保育実践演習・ゼミナール（応用）・子どもの健康と安全・保育の計画と評価			
2. 教育の理念・目的			
○保育現場での経験を生かした授業をすることで、大学での学びと保育現場での保育の段差を小さくし、実践力のある保育者を育成する。 ○学生一人一人に向き合い、学生理解をした上で学生の思いに寄り添った支援を行い学生の意欲を引き出し、達成感を感じることで自己肯定感を上げる。 ○学生が人との関わり方を今一度考え、コミュニケーション能力を高めるよう援助する。 ○自ら学ぶ姿勢を忘れないように学生とともに成長する			
3. 教育の方法			
○何もなくても知っている学生に会ったときには一言言葉をかけることで、学生に「あなたのことを見守っているよ」のメッセージを送る。 ○どの教科でも授業の中でできるだけ、自分の体験や子どもたちの姿を具体的に伝えるようにしている。 ○学生の意見を否定せず、共感したり認めたりする。 ○振り返りシートを書かせることで学生の理解度や意欲を確認する。			
4. 教育の成果			
5. 今後の目標			
・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）			

学部・学科	人間教育学部人間教育学科	氏名	間井谷容代
1. 教育の責任			
・子どもと健康の指導法 ・子どもと健康 ・施設実習指導Ⅰ・施設実習指導Ⅱ ・施設実習Ⅰ・施設実習Ⅱ ・保育所実習指導Ⅰ・保育所実習指導Ⅱ ・保育所実習Ⅰ ・保育所実習Ⅱ ・保育実践演習 ・人間教育学ゼミナールⅠ（基礎） ・人間教育学ゼミナールⅡ（応用） ・障害児保育			
2. 教育の理念・目的			
・明日の社会を開く学識と実務能力を兼ね備えた指導的人材の育成を目指し、時代の進展に対応し得る広い視野と創造性をつちかい、誠実にして協調性のある心身ともに豊かでたくましい実践力を持った人材を育成する。 ・学生各々が、保育現場に必要な実務能力を発揮できるように基本的な専門知識と技術を身に付け、常にその保育をする意味や子どもの行動の意味を理解できる学生を育成する。			
3. 教育の方法			
・学生と教員という立場に距離があっても、話せる雰囲気をもてるように心がける。学生の困り感に気付けるように努め、即、対応できるように努める。 ・授業内容については、講義だけでは理解できない実践内容もあるため、できるだけ具体的な事例をあげ、イメージが持てるように努める。また、時々、動画等の資料を取り入れ指導を進める。 ・保育の専門として学会での口頭発表等を聴き、論文集、教材となる書物を読む。専門教科の知識を得て、次へと繋げるように努める。また今後、もっと深く授業展開ができるように努める。			
☒			
4. 教育の成果			
・シラバス通りに展開できないこともあったが、動画教材を通して、分析の方法や子どもから見る視点等を、具体的に伝えることができた。 ・パワーポイントを活用しての授業は進めるため、速くなることがある。気を付けてきているが、時に学生からコメントとしてくいることもある。スライド作成で検討を行い、スムーズに展開できるように努めた。 ・実習については事前の模擬授業、資料作成等を行うことで、実習で活用ができたようである。今後も同様に、実習・就職試験等の検討材料となるように進めていきたいと考えている。			
5. 今後の目標			
・学生自身が主体的に学ぶことを目標とする。将来、保育者となる学生が自ら学ぶことにより、アクティブラーニングの実践に繋げることができると考えている。 具体策として、実技実践に自信がつくように、展開法等を学生の意見に合わせて検討するように努める。例えば教材作成については。学生にイメージを持たせ、学生の意見を取り入れながら、具体的な展開方法を提案するように心がけたいと考える。			
6. 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）			
・授業では、随時授業内容の質問や相談に応じるようにしている。			
☒			